南相馬市埋蔵文化財調査報告書 第40集

南相馬市内遺跡発掘調査報告書16

ー令和３年度試掘調査報告ー

羽山岳の木戸跡　（３次調査）
萱浜原畑遺跡　（４次調査）
片草南原遺跡　（４次調査）
羽山Ｂ遺跡
松ヶ沢Ａ遺跡　（２次調査）
白幡前遺跡　（３次調査）
真野古墳群Ｂ地区　（３次調査）
高見町Ｂ遺跡　（７次調査）
東町遺跡　（５次調査）
八幡林遺跡　（20次調査）
荒神前遺跡　（10次調査）
北原貝塚　（２次調査）
北原田Ｂ遺跡
長野南原遺跡　（４次調査）
西廻東廻横穴墓群
反町遺跡

令和５年３月
南相馬市教育委員会

南相馬市埋蔵文化財調査報告書 第40集

南相馬市内遺跡発掘調査報告書16

－令和３年度試掘調査報告－

羽山岳の木戸跡　（３次調査）
萱浜原畑遺跡　（４次調査）
片草南原遺跡　（４次調査）
羽山Ｂ遺跡
松ヶ沢Ａ遺跡　（２次調査）
白幡前遺跡　（３次調査）
真野古墳群Ｂ地区　（３次調査）
高見町Ｂ遺跡　（７次調査）
東町遺跡　（５次調査）
八幡林遺跡　（20次調査）
荒神前遺跡　（10次調査）
北原貝塚　（２次調査）
北原田Ｂ遺跡
長野南原遺跡　（４次調査）
西廻東廻横穴墓群
反町遺跡

令和５年３月
南相馬市教育委員会

序　　文

令和３年（2021）は、平成 23 年（2011）３月 11 日に発生した東日本大震災から 10 年目の節目の年を向かえることとなりました。地震発生当時は小学生であった児童達も成人となり、それぞれに大きな希望を胸に社会の一員となるまでの月日が流れました。

この間、岩手県・宮城県・福島県の被災三県では、震災復興のためにさまざまな事業がおこなわれ、徐々にかつての故郷の姿を取り戻しつつありますが、東日本大震災が社会や人々の心に残した大きな傷跡は完全に癒されることはなく、10 年が経過した今日でも各地で懸命に復興に向けた取り組みが行われています。

本書は、このような状況のなか、令和３年度に文部科学省の補助金の採択を受け、南相馬市内で実施された埋蔵文化財発掘調査の成果報告書です。令和３年度に南相馬市内で計画された各種開発事業の内容をみると、東日本大震災からの復興にともなう開発事業は姿を消し、埋蔵文化財保護の面では震災前の落ち着きを取り戻しつつあります。

埋蔵文化財をはじめとする地域に残る文化財は、我が国の長い歴史の中で生まれ、今日まで守り伝えられてきた国民共有の財産であるとともに、その地域の歴史、伝統、文化などの理解のために欠くことのできないものであり、将来の文化の向上や発展、そして地域のアイデンティティー形成の根幹をなすものであります。

これらの埋蔵文化財の発掘調査の成果が、文化財の保護や地域研究、更には東日本大震災で被災され方々の目に触れ、震災を経験した南相馬市の復興の礎として活用されることを祈念します。

終わりに、令和３年度に実施した発掘調査にご協力賜わりました地権者の皆様、ならびに関係機関の皆様、加えて震災復旧、復興にご支援、ご尽力頂きました皆様に、心から感謝申し上げ、序文のあいさつといたします。

令和５年３月

南相馬市教育委員会
教育長　大和田 博行

例　　言

1．本書に記載した内容は、令和３年度に南相馬市教育委員会が実施した、南相馬市内の埋蔵文化財試掘調査の成果報告である。

2．試掘調査等にかかる経費は、文部科学省の補助金の採択を得て実施した。

3．試掘調査ならびに報告書刊行は、以下の体制で実施した。

・調査期間　令和３年４月１日～令和４年３月 31 日
・整理期間　令和３年４月１日～令和５年３月 31 日
・調査主体　南相馬市教育委員会
事務局：南相馬市教育委員会文化財課

【令和３年度】

教育長	大和田 博行	主任文化財主事	藤木　海
事務局長	午来　学	主任文化財主事	佐川　久
文化財課長	鈴木　悦子	主任文化財主事	佐藤　友之
課長補佐兼文化財係長	齋藤　直之	埋蔵文化財調査員	濱須　脩
埋蔵文化財担当係長	川田　強	会計任用職員	山田　恵子

【令和４年度】

教育長	大和田 博行	主任文化財主事	藤木　海
事務局長	鎌田　由光	主任文化財主事	荒　淑人
文化財課長	鈴木　悦子	主任文化財主事	佐藤　友之
課長補佐兼文化財係長	齋藤　直之	主事	笠間　良之
埋蔵文化財担当係長	川田　強	文化財主事	杉浦　弘佳
		会計任用職員	山田　恵子

整理補助員　泉田 あずさ・岩崎 美和子・土屋 和美・寺島 千尋・山本 樹里

4．発掘調査に際しては、次の機関及び個人から協力を得た。記して感謝の意を申し上げる。

文化庁・福島県教育委員会・株式会社 Soma Clean Energy・株式会社ふくしまエナジー・株式会社アイダ設計・株式会社アーネストワン・有限会社カネタ菅波・株式会社泉田組・株式会社 GREAT・社会福祉法人竹水会・遠藤一夫・遠藤美喜雄・大井一善・川島敏範・小林ユキ子・小林寛明・坂本和江・佐藤貴之・佐藤浩尚・鈴木直子・鈴木重信・羽山勝治・原内トシ子・古川純・門馬広毅

5．本報告書に掲載した文章ならびに挿図・写真図版の作成は川田・荒が行い、最終的な編集は荒が行った。

6．調査で得られた資料は、南相馬市教育委員会が保管している。

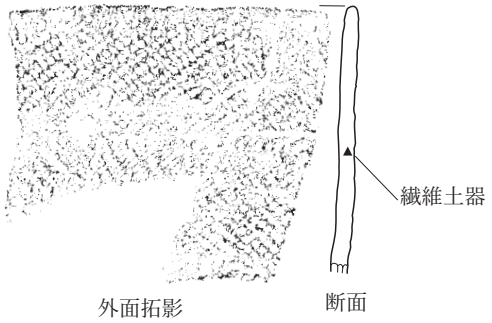
凡　例

1．図中の方位は真北方向を示し、水糸レベルは海抜高度を示す。

2．本文並びに図作成に使用した記号・略号は、以下の内容を示す。

T：トレンチ　SB：掘立柱建物跡　SD：溝跡　SI：竪穴住居跡　SK：土坑　P：ピット

SX：性格不明遺構　L：基本層位



目　次

序　　文 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ i
例　　言 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ iii
凡　　例 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ iv
目　　次 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ v
挿図目次 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ vi
写真目次 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ vi

第Ⅰ章　南相馬市を取り巻く環境 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1

第１節　遺跡を取り巻く環境 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1

第１項　地理的環境 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
第２項　歴史的環境 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1

第Ⅱ章　調査に至る経過 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 7

第１節　調査に至る経過 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 7

第１項　令和３年度試掘調査の経過 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 7

第Ⅲ章　調査成果 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 11

第１節　令和３年度試掘調査成果 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 11

第１項　羽山岳の木戸跡（３次調査）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 11
第２項　萱浜原畑遺跡（４次調査）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 23
第３項　羽山Ｂ遺跡 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 24
第４項　片草南原遺跡（４次調査）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 25
第５項　松ヶ沢Ａ遺跡（２次調査）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 26
第６項　白幡前遺跡（３次調査）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 28
第７項　真野古墳群Ｂ地区（３次調査）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 29
第８項　高見町Ｂ遺跡（７次調査）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 30
第９項　東町遺跡（５次調査）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 31
第10項　八幡林遺跡（20次調査）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 32
第11項　荒神前遺跡（10次調査）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 36
第12項　北原貝塚（６次調査）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 37
第13項　長野南原遺跡（５次調査）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 55
第14項　北原田Ｂ遺跡 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 58
第15項　西迫東迫横穴墓群 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 59
第16項　反町遺跡 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 62

報告書抄録
奥　　付

挿図目次

図１　南相馬市位置図 ・・・・・・・・・・・・・・・ 1
図２　主要遺跡位置図 ・・・・・・・・・・・・・・・ 6
図３　令和３年度試掘調査位置図・・・・・・・・・10
図４　羽山岳の木戸跡位置図・・・・・・・・・・・11
図５　測量範囲位置図 ・・・・・・・・・・・・・・11
図６　石垣部平面図 ・・・・・・・・・・・・・・・12
図７　石垣部平面図 ・・・・・・・・・・・・・・・13
図８　石垣部立面図（北面）・・・・・・・・・・・14
図９　石垣部立面図（東面）・・・・・・・・・・・15
図 10　石垣部立面図（南面）・・・・・・・・・・・16
図 11　修復範囲図 ・・・・・・・・・・・・・・・・17
図 12　断面図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・19
図 13　萱浜原畑遺跡位置図・・・・・・・・・・・・23
図 14　調査区位置図 ・・・・・・・・・・・・・・・23
図 15　羽山Ｂ遺跡位置図・・・・・・・・・・・・・24
図 16　調査区位置図 ・・・・・・・・・・・・・・・24
図 17　片草南原遺跡位置図・・・・・・・・・・・・25
図 18　調査区位置図 ・・・・・・・・・・・・・・・25
図 19　松ヶ沢Ａ遺跡位置図・・・・・・・・・・・・26
図 20　調査区・遺構分布図・・・・・・・・・・・・26
図 21　白幡前遺跡位置図・・・・・・・・・・・・・28
図 22　調査区位置図 ・・・・・・・・・・・・・・・28
図 23　真野古墳群Ｂ地区位置図 ・・・・・・・・・29
図 24　調査区位置図 ・・・・・・・・・・・・・・・29
図 25　高見町Ｂ遺跡位置図 ・・・・・・・・・・・30
図 26　調査区位置図 ・・・・・・・・・・・・・・・30
図 27　東町遺跡位置図 ・・・・・・・・・・・・・・31
図 28　調査区位置図 ・・・・・・・・・・・・・・・31
図 29　八幡林遺跡位置図・・・・・・・・・・・・・32
図 30　調査区位置図 ・・・・・・・・・・・・・・・32
図 31　古墳分布図 ・・・・・・・・・・・・・・・・33
図 32　荒神前遺跡位置図・・・・・・・・・・・・・36
図 33　調査区位置図 ・・・・・・・・・・・・・・・36
図 34　北原貝塚位置図 ・・・・・・・・・・・・・・37
図 35　北原貝塚調査場所図面・・・・・・・・・・・38
図 36　北原貝塚調査場所図面・・・・・・・・・・・39
図 37　北原貝塚調査断面図（１）・・・・・・・・・40
図 38　北原貝塚調査断面図（2）・・・・・・・・・41
図 39　北原貝塚出土遺物（１）・・・・・・・・・・43
図 40　北原貝塚出土遺物（２）・・・・・・・・・・44
図 41　北原貝塚出土遺物（３）・・・・・・・・・・45
図 42　北原貝塚出土遺物（４）・・・・・・・・・・46
図 43　北原貝塚出土遺物（５）・・・・・・・・・・47
図 44　長野南原遺跡位置図・・・・・・・・・・・・55
図 45　調査区位置図 ・・・・・・・・・・・・・・・55
図 46　遺構配置図 ・・・・・・・・・・・・・・・・56
図 47　北原田Ｂ遺跡位置図・・・・・・・・・・・・58
図 48　調査区位置図 ・・・・・・・・・・・・・・・58
図 49　西廻東廻横穴墓群位置図 ・・・・・・・・・59
図 50　調査区位置図 ・・・・・・・・・・・・・・・59
図 51　横穴墓分布図 ・・・・・・・・・・・・・・・59
図 52　反町遺跡位置図・・・・・・・・・・・・・・62
図 53　調査区位置図 ・・・・・・・・・・・・・・・62

写真目次

写真１　宮城県沖地震被害状況（東面）・・・・・20
写真２　宮城県沖地震被害状況（東面）・・・・・20
写真３　宮城県沖地震被害状況（南面）・・・・・20
写真４　宮城県沖地震被害状況（北面）・・・・・20
写真５　石取り上げ後状況１・・・・・・・・・・20
写真６　石取り上げ後状況２・・・・・・・・・・20
写真７　石取り上げ後状況３・・・・・・・・・・20
写真８　石取り上げ後状況４・・・・・・・・・・20
写真９　調査状況１ ・・・・・・・・・・・・・・・21
写真 10　調査状況２ ・・・・・・・・・・・・・・・21
写真 11　土手断面（E-F)1 ・・・・・・・・・・・21
写真 12　土手断面（E-F)2・・・・・・・・・・・ 21
写真 13　土手断面（G-H)1・・・・・・・・・・・21
写真 14　土手断面（G-H)2・・・・・・・・・・・21
写真 15　掘削作業完了状況１・・・・・・・・・・21
写真 16　掘削作業完了状況２・・・・・・・・・・21
写真 17　応急措置状況 ・・・・・・・・・・・・・22
写真 18　復元作業状況１・・・・・・・・・・・・22
写真 19　復元作業状況２・・・・・・・・・・・・22
写真 20　復元作業状況３・・・・・・・・・・・・22
写真 21　復元作業状況４・・・・・・・・・・・・22
写真 22　復元完了（南面）・・・・・・・・・・・22
写真 23　復元完了（北面）・・・・・・・・・・・22
写真 24　復元完了（東・北面）・・・・・・・・・22
写真 25　１Ｔ調査状況 ・・・・・・・・・・・・・23
写真 26　土層断面 ・・・・・・・・・・・・・・・23
写真 27　１Ｇ調査状況 ・・・・・・・・・・・・・24
写真 28　２Ｇ調査状況 ・・・・・・・・・・・・・24
写真 29　調査状況 ・・・・・・・・・・・・・・・25
写真 30　土層断面 ・・・・・・・・・・・・・・・25

写真 31　27 T廃滓場南端 ・・・・・・・・・・・・ 27
写真 32　28 T廃滓場西端 ・・・・・・・・・・・・ 27
写真 33　31 T廃滓場中央 ・・・・・・・・・・・・ 27
写真 34　30 T廃滓場北端 ・・・・・・・・・・・・ 27
写真 35　39 T木炭焼成土坑検出状況・・・・・・ 27
写真 36　39 T木炭焼成土坑完掘状況・・・・・・ 27
写真 37　調査状況 ・・・・・・・・・・・・・・・・ 28
写真 38　土層断面 ・・・・・・・・・・・・・・・・ 28
写真 39　1 T 調査状況 ・・・・・・・・・・・・・・ 29
写真 40　2 T 調査状況 ・・・・・・・・・・・・・・ 29
写真 41　1 T 調査状況 ・・・・・・・・・・・・・・ 30
写真 42　2 T 調査状況 ・・・・・・・・・・・・・・ 30
写真 43　調査状況 ・・・・・・・・・・・・・・・・ 31
写真 44　土層断面 ・・・・・・・・・・・・・・・・ 31
写真 45　1 T（1 号墳）調査状況・・・・・・・・ 34
写真 46　2 T（1 号墳）調査状況・・・・・・・・ 34
写真 47　3 T（3 号墳）調査状況・・・・・・・・ 34
写真 48　5 T（3 号墳）調査状況・・・・・・・・ 34
写真 49　7 T（2 号墳）調査状況・・・・・・・・ 35
写真 50　15T（2 号墳）調査状況 ・・・・・・・ 35
写真 51　9 T（4 号墳）調査状況・・・・・・・・ 35
写真 52　11T（5 号墳）調査状況 ・・・・・・・ 35
写真 53　16T（5 号墳）調査状況 ・・・・・・・ 35
写真 54　作業風景 ・・・・・・・・・・・・・・・・ 35
写真 55　1 T 調査状況 ・・・・・・・・・・・・・・ 36
写真 56　土層断面 ・・・・・・・・・・・・・・・・ 36
写真 57　17T 全景（西から）・・・・・・・・・・ 48
写真 58　17T 北側壁面堆積状況（西から）・・・ 48
写真 59　17T 北側壁面堆積状況（東から）・・・ 48
写真 60　21 T全景（東から）・・・・・・・・・・ 48
写真 61　18T 全景（東から）・・・・・・・・・・ 48
写真 62　18T 全景（西から）・・・・・・・・・・ 49
写真 63　18T 南側壁面堆積状況（1）・・・・・・ 49
写真 64　18T 南側壁面堆積状況（2）・・・・・・ 49
写真 65　18T 遺物出土状況（1）・・・・・・・・ 49
写真 66　18T 遺物出土状況（2）・・・・・・・・ 49
写真 67　22T 全景（西から）・・・・・・・・・・ 49
写真 68　23 T（西から）・・・・・・・・・・・・ 49
写真 69　25T 全景（東から）・・・・・・・・・・ 49
写真 70　出土遺物（1）・・・・・・・・・・・・・ 50
写真 71　出土遺物（2）・・・・・・・・・・・・・ 51
写真 72　出土遺物（3）・・・・・・・・・・・・・ 52
写真 73　調査区遠景 ・・・・・・・・・・・・・・ 55
写真 74　重機掘削状況 ・・・・・・・・・・・・・ 55
写真 75　3 T 調査状況 ・・・・・・・・・・・・・ 57
写真 76　12T 調査状況・・・・・・・・・・・・・ 57
写真 77　3 T 土層断面 ・・・・・・・・・・・・・ 57
写真 78　12T 土層断面・・・・・・・・・・・・・ 57
写真 79　1 T 調査状況 ・・・・・・・・・・・・・ 57
写真 80　14T 調査状況・・・・・・・・・・・・・ 57
写真 81　1 T 調査状況 ・・・・・・・・・・・・・ 58
写真 82　2 T 調査状況 ・・・・・・・・・・・・・ 58
写真 83　1 T 調査状況 ・・・・・・・・・・・・・ 60
写真 84　1 号墓検出状況・・・・・・・・・・・・ 60
写真 85　3 T 調査状況 ・・・・・・・・・・・・・ 60
写真 86　3 号墓検出状況・・・・・・・・・・・・ 60
写真 87　5 号墓前庭部検出状況 ・・・・・・・・ 60
写真 88　10 号墓開口状況 ・・・・・・・・・・・ 61
写真 89　10 号墓前庭部・・・・・・・・・・・・・ 61
写真 90　12T 調査状況・・・・・・・・・・・・・ 61
写真 91　10T 基本土層・・・・・・・・・・・・・ 61
写真 92　作業風景 ・・・・・・・・・・・・・・・ 61
写真 93　作業風景 ・・・・・・・・・・・・・・・ 61
写真 94　1 T 調査状況 ・・・・・・・・・・・・・ 62
写真 95　2 T 調査状況 ・・・・・・・・・・・・・ 62

第Ⅰ章　南相馬市を取り巻く環境

第１節　遺跡を取り巻く環境

第１項　地理的環境

福島県南相馬市は、福島県太平洋岸の中央部やや北寄りに位置する。行政境としては、北側は相馬市、南側は双葉郡浪江町、西側は相馬郡飯舘村と接する。

浜通り地方の地質は、阿武隈高地東縁部と浜通り低地帯、双葉断層（岩沼－久之浜構造線）により明瞭に区分される。

図１　南相馬市位置図

市内の地形を見ると、西部域に南北方向に連なる阿武隈高地が縦走し、そこから太平洋に向かって派生する低丘陵と丘陵間に開析された沖積平野で構成され、阿武隈高地にかかる西側の丘陵の標高は 100 ～ 150 ｍを測り、海岸部に近い市内中心付近では標高 50 ～ 60 ｍ前後、海岸部では 20 ～ 30 ｍとなる。

第２項　歴史的環境

本項では、南相馬市内に所在する埋蔵文化財のうち、概要の判明しているものを時代の古い順から記載して、市内の歴史的環境を概観する。

まず、南相馬市内に所在する旧石器時代の遺跡としては、荻原遺跡（１）･大谷地遺跡（２）･高松遺跡（３）･西町遺跡（４）･橋本町Ａ遺跡（５）･橋本町Ｂ遺跡（６）･陣ヶ崎Ａ遺跡（７）･押釜前田遺跡（８）･滝ノ原遺跡（９）･石倉遺跡（10）･熊下遺跡（11）･畦原Ａ遺跡（12）･四ッ栗遺跡（13）・広谷地遺跡（14）の 14 遺跡で旧石器時代の遺物が出土・採集されている。

このうち、代表的な旧石器時代の遺跡としては、小高川の支流である北鳩原川と大穴川により開析された丘陵の東端にある荻原遺跡がある。荻原遺跡では中位第Ⅱ段丘面から８カ所の石器集中部が確認され、荻原Ⅰ石器群と荻原Ⅱ石器群が設定された。これまでの４次に渡る調査では 171 点の資料が得られており、ナイフ形石器・刃部磨製石斧・彫器・楔形石器・二次加工のある剥片・微細剥離のある剥片・削片・破片・石核などが認められ、これらは姶良Ｔｎ火山灰の（ＡＴ）の可能性があるバブル型火山ガラスの直下から出土し、基部加工のナイフ形石器と刃部磨製石斧に代表される石器群であることから、後期旧石器時代前半頃の新しい時期に位置づけられている。そのほか四ッ栗遺跡や広谷地遺跡の発掘調査において石刃などの旧石器が出土している。

上記以外の遺跡で得られた旧石器は、いずれも竹島國基氏をはじめとする地域の研究者の表

面採集によるもので、ナイフ形石器、彫刻刀形石器、尖頭器、石核、エンドスクレイパー石刃などがある。これらの石器に使用された石材は、おもに珪質頁岩が多く、前田遺跡の彫刻刀形石器は神山型、石倉遺跡の彫刻刀型石器は小坂型との類似点が認められることから、後期旧石器時代後半段階のもので、荻原遺跡出土石器よりもやや新しい時期のものが多い。

縄文時代になると遺跡の数が増加し、山間部から平野部までの河川流域で縄文時代早期から晩期までの各時期の遺跡が確認されている。特に小高川流域、井田川・宮田川流域では片草貝塚（15）・加賀後貝塚（16）・北原貝塚（17）・浦尻貝塚（18）・角部内南台貝塚（19）・宮田貝塚（20）・小谷津貝塚（21）など貝塚をともなう集落が確認されている。

これらの貝塚のなかでも、国史跡浦尻貝塚と北原貝塚は、かつての井田川浦南側の台地上に営まれた貝塚をともなう集落である。浦尻貝塚の貝層は南台・台ノ前・西向・小廻地区の４地点に分布し、前期後葉から晩期までの各時期の貝層が確認されている。出土資料の中には早期末葉から前期前葉の資料を少量含むものの、貝塚が本格的に形成され始めるのは前期後葉の大木３・４式期にあり、集落の形成は大木１・２式土器を主体とする北原貝塚から浦尻貝塚に移行した可能性がある。大木５・６式段階には再び北原貝塚において積極的な貝塚の形成が見られ、浦尻貝塚と北原貝塚における集落の形成には密接な関係があった可能性が高い。

縄文時代中期には、宮後Ａ遺跡（22）・宮後Ｂ遺跡（23）・八幡林遺跡（24）・押釜前田遺跡（８）・東町遺跡（25）・高松遺跡（27）・吉名中坪遺跡（28）などで調査が行われている。真野川上流域にある宮後Ｂ遺跡からは、敷石をともなう竪穴住居跡から、大木 10 式期の土器に人体を表現したような文様を持つ壺が出土している。東町遺跡では大木８ｂ～ 10 式期の竪穴住居跡 32 軒が幾重にも重複する状態で確認されており、新田川下流域の中心的な集落遺跡であったことが確認されている。

縄文時代後期の遺跡としては、真野川と上真野川が合流する沖積低地に隣接して立地する、中才遺跡（29）・鷺内遺跡（30）から製塩土器とともに編組製品が出土している。とくに鷺内遺跡の低地性土坑からは合計 19 点の編組製品が出土し、このなかにはオニグルミを収納した状態のカゴ製品が出土している点は特筆される。太田川流域にある上ノ内遺跡（31）・町川原遺跡（32）からは綱取式土器が多量に出土している。

縄文時代晩期の遺跡の調査は多くないが､片倉の羽山遺跡（33）では晩期の大洞Ｃ１～Ａ式、高見町Ａ遺跡（34）では晩期中葉の土器と石囲炉をもつ住居跡が調査されている。

弥生時代に位置づけられる遺跡の調査は少なく、確実に前期に位置づけられる集落は確認されていない。当該期の遺跡が増加するのが中期段階からで、桜井古墳（35）や川内廻Ｂ遺跡群Ｆ地点（36）では中期中葉の桝形囲式が出土し、市内の沖積地に発達した微高地にある中島舘跡（37）・仲沖遺跡（38）や低丘陵上からは、中期後葉に位置づけられる桜井式土器が出土しており、中期後葉段階の集落の立地が多様であったことがうかがえる。また、桜井遺跡群や天神沢遺跡（39）は、桜井式期の石庖丁や磨製石斧・打製石器が多量に採集されたことで著名である。

弥生時代後期から終末期には、北関東の太平洋側に分布する十王台式土器や天王山式土器を

出土する遺跡が散見されるが、その詳細な内容が判明している調査例はまだない。

古墳時代では、古墳時代前期に新田川流域にある荒井前遺跡（40）で方形周溝墓の造営がはじまり、続いて河岸段丘上に国史跡桜井古墳（35）と桜井古墳群上渋佐支群７号墳（41）が築造される。桜井古墳は墳丘主軸長約 75 ｍを計測する大型の前方後方墳で、墳長平坦面の２ヶ所に木棺の腐朽による陥没坑が確認され、上渋佐支群７号墳では二段墓壙の内部に組み合わせ式木棺を直葬し、布で包まれた仿製珠文鏡が木箱に治められた状態で出土している。その他に真野川流域の柚原古墳群（42）・小高流域の歓請内古墳（43）が塩釜式土器を出土する古墳群である。真野川下流域の低丘陵上にある永田古墳群Ｂ１号墳（44）も前期に築造された可能性のある古墳である。

八幡林遺跡（24）・高見町Ａ遺跡（34）・高見町Ｂ遺跡（45）・東広畑Ｂ遺跡（46）・五畝田・犬這遺跡（47）・南海老南町遺跡（48）・湊遺跡（49）・梨木下西舘跡（50）は、塩釜式土器を出土する主な集落遺跡であり、河岸段丘面や浜堤上に点在する形で分布している。

古墳時代中期に位置づけられる可能性のある古墳としては、太田川流域にある前方後円墳である上ノ内前田古墳（51）や、円筒埴輪をともなう真野古墳群（52）･横手古墳群Ｂ地区（53）、多量の石製模造品を出土した真野古墳群Ａ地区 49 号墳や塚原古墳群（54）などは、中期後半段階まで遡る可能性のある古墳群であるが、前期から続く中期前半段階に位置づけられる首長墓は見当たらない。

この時期の集落は、真野川下流域の反町遺跡（55）・桶師屋遺跡（56）、新田川流域の前屋敷遺跡（57）・原山遺跡（58）、小高川流域の中島舘跡（37）・仲沖遺跡（38）で南小泉式土器を出土する。とくに真野川流域にある反町遺跡と桶師屋遺跡は大規模な区画溝がともなうことから、豪族居館の可能性が示唆される集落である。

古墳時代後期には、河岸段丘面に立地する桜井古墳群高見町支群（59）・真野古墳群（52）・横手古墳群Ａ地区（60）・片草古墳群（61）などで古墳群の造営が開始される。真野古墳群は、かつて小規模な前方後円墳２基を含む 100 基を超える規模の古墳群で、東北地方を代表する後期群集墳として著名である。そのほかには市内で最も大きな前方後円墳の与太郎内古墳群１号墳（62）や、低丘陵頂部に造営された小規模な群集墳である荷渡古墳群（63）･北山古墳群（64）･北原古墳群（65）などがある。

大六天遺跡（66）・迎畑遺跡（67）・地蔵堂Ｂ遺跡（68）・片草古墳群一里段支群（69）・中村平遺跡（70）は、後期から終末期の土器を出土する集落遺跡である。

古墳時代終末期に位置づけられる古墳は、切石を用いた横穴式石室が採用された真野川流域の横手古墳群Ｂ地区１号墳が唯一で、その大部分が横穴墓となる。横穴墓のうち大窪横穴墓群（71）・羽山横穴墓群（72）・浪岩横穴墓群（73）は玄室内部に装飾壁画が見られ、真野川流域の中谷地横穴墓群（74）は複室構造の玄室を採用している。真野川流域にある大窪横穴墓群や太田川流域にある西廻横穴墓群（75）と隣接する西廻東廻横穴墓群（76）では、50 基をこえる横穴墓が確認されている。発掘調査が行われた西廻横穴墓群では、３～５基程度の横穴墓が小規模なグループを形成しており、出土遺物には湖西産・猿投窯産・渥美窯産の瓶類に在地

窯産の甕が加わる器種組成が見られた。

奈良・平安時代の遺跡では、行方郡家である泉官衙遺跡（77）があり、３時期に変遷する郡庁院・正倉院と舘院や水運関連施設などが確認されている。横手廃寺跡（78）・真野古城跡（79）・植松廃寺跡（80）は瓦が出土する遺跡であり、有力豪族に関連した寺院と考えられる。

入道廻瓦窯跡（81）・京塚沢瓦窯跡（82）・犬這瓦窯（83）などは官衙や寺院の瓦を焼成した窯跡である。特に京塚沢瓦窯跡は泉官衙遺跡、入道廻瓦窯跡は植松廃寺跡に瓦を供給していることが判明している。

市内の低丘陵では製鉄に関連した遺跡が多数確認されている。かつては相馬市にある武井地区製鉄遺跡群や南相馬市にある金沢製鉄遺跡群（84）などの大規模な発掘調査の成果から、現在の相馬市・南相馬市がある福島県浜通り地方北部が、律令国家における製鉄の拠点であったと評価されてきたが、近年では南相馬市の割田製鉄遺跡群（85）・蛭沢遺跡（86）・川内廻Ｂ遺跡群（87）・出口遺跡（88）・大塚遺跡（89）・横大道遺跡（90）・館腰遺跡（91）・椴木沢Ｃ遺跡（92）・東廻遺跡（93）などで調査が進展するとともに、双葉郡でも多くの製鉄遺跡が分布していることが判明しており、福島県浜通り地方全体が、当該期の一大製鉄地帯となっていたと考えられる。

集落遺跡では広畑遺跡（94）や上渋佐原田遺跡（95）・桜井Ｄ遺跡（96）・大六天遺跡（97）・町川原遺跡（31）などで、当該期の竪穴住居跡等が確認されている。このうち泉官衙遺跡に隣接する広畑遺跡からは「寺」「厨」などの墨書土器とともに灰釉陶器が出土し泉官衙遺跡との関連が示唆され、大六天遺跡から出土した「小穀殿千之」と刻書された須恵器は行方軍団との関わりが見られる資料である。上渋佐原田遺跡では、３時期に区分される 13 軒の竪穴住居跡と 26 棟の掘立柱建物跡が、計画的に建設されていたことが判明している。

国史跡観音堂石仏（98）・薬師堂石仏附阿弥陀堂石仏（99）は平安時代に造営されたと考えられる大規模な磨崖仏であり、古代のおける仏教の伝播や信仰を知るうえで貴重である。

中世の遺跡としては城館跡が挙げられ、下総国から下向した相馬氏の最初の居城となる別所館跡（100）や牛越城跡（101）・村上城跡（102）は、相馬氏に関連する城館跡として良く知られている。

小高城跡（103）は相馬氏の居城として機能した平山城である。本城跡は嘉暦元年から慶長十六年に相馬利胤が中村城を築城するまでの約 290 年間、相馬氏が当地方を統治するうえで重要な役割を占めた。その他では泉平舘跡（104）・泉館跡（105）・下北高平館跡（106）で調査が行われている。南海老南町遺跡（48）では、多くの掘立柱建物跡が確認されており、13 世紀後半か 14 世紀に位置づけられるカワラケが出土しており、掘立柱建物跡を主体とする集落であった可能性がある。

近世の遺構は、寛文六年以降に築かれた野馬土手と、その出入口となる木戸跡がある。野馬土手は、野馬追が執り行われる雲雀ヶ原扇状地を囲むように、東西約 10km ×南北約 2.6km の範囲に築かれており、土手内外の出入り口となった木戸跡のうちのひとつである羽山岳の木戸跡（107）は南相馬市指定史跡に指定され良好な形で保存されている。

近世後半から近代にかけては中村藩の大規模なたたらである馬場遺跡（108）や、多くの近世墓が正福寺跡（109）、法幢寺跡（110）などで調査されている。

No.	遺跡名	種別	時代
1	荻原遺跡	集落・散布地	旧石器・縄文
2	大谷地遺跡	散布地	旧石器・縄文
3	高松遺跡	集落・散布地	旧石器・縄文・弥生
4	西町遺跡	散布地	旧石器
5	橋本町Ａ遺跡	散布地	旧石器
6	橋本町Ｂ遺跡	散布地	旧石器
7	陣ヶ崎Ａ遺跡	集落・散布地	旧石器・縄文
8	押釜前田遺跡	集落・散布地	旧石器・縄文
9	滝ノ原遺跡	集落・散布地	旧石器・縄文・弥生
10	石倉遺跡	散布地	旧石器・縄文・弥生・古墳
11	熊下遺跡	散布地	旧石器
12	畦原Ａ遺跡	散布地	旧石器・縄文・奈良・平安
13	四ッ栗遺跡	集落・散布地	旧石器・縄文
14	広谷地遺跡	集落・窯跡	旧石器・縄文・平安
15	片草貝塚	貝塚	縄文
16	加賀後貝塚	貝塚・集落	縄文・弥生・古墳・奈良・平安
17	北原貝塚	貝塚	縄文
18	浦尻貝塚	貝塚・集落	縄文・平安
19	角部内南台貝塚	貝塚・集落	縄文・平安
20	宮田貝塚	貝塚	縄文
21	小谷津貝塚	貝塚	縄文
22	宮後Ａ遺跡	集落・散布地	縄文
23	宮後Ｂ遺跡	製鉄・散布地	縄文・古墳・奈良・平安
24	八幡林遺跡	集落・散布地	縄文・古墳・奈良・平安
25	東町遺跡	集落	縄文・平安
26	吉名中坪遺跡	集落・散布地	縄文・弥生・古墳
27	中才遺跡	散布地	縄文
28	鷺内遺跡	集落	縄文・古墳・平安
29	上ノ内遺跡	散布地	縄文
30	町川原遺跡	集落	縄文・奈良・平安・近世
31	羽山遺跡	集落・散布地	縄文
32	高見町Ａ遺跡	集落・散布地	縄文・弥生・古墳
33	桜井古墳	古墳・散布地	弥生・古墳・平安
34	川内廻Ｂ遺跡群Ｆ地点	散布地	弥生
35	中島館跡	舘跡・散布地	弥生・中世
36	仲沖遺跡	散布地	弥生・古墳・奈良・平安
37	天神沢遺跡	散布地	弥生
38	荒井前遺跡	集落・墳墓	古墳・奈良・平安・中世・近世
39	桜井古墳群上渋佐支群	古墳	古墳
40	柚原古墳群	古墳	古墳
41	歓請内古墳	古墳	古墳
42	永田古墳群Ｂ	古墳	古墳
43	高見町Ｂ遺跡	集落・散布地	弥生・古墳
44	東広畑Ｂ遺跡	集落・散布地	古墳・平安
45	五畝田犬這遺跡	集落	古墳・奈良・平安
46	南海老南町遺跡	集落	古墳・中世
47	湊遺跡	集落	古墳
48	梨木下西館跡	集落	弥生・古墳・奈良・平安・中世
49	上ノ内前田遺跡	古墳	古墳
50	真野古墳群	古墳	古墳
51	横手古墳群Ｂ地区	古墳	古墳
52	塚原古墳群	古墳	古墳
53	反町遺跡	古墳・平安	集落
54	桶師屋遺跡	集落	古墳・奈良・平安・中世・近世
55	上渋佐前屋敷遺跡	集落	縄文・古墳・平安
56	原山遺跡	集落	古墳・奈良・平安
57	桜井古墳群高見町支群	古墳	古墳
58	横手古墳群Ａ地区	古墳	古墳
59	片草古墳群	古墳	古墳
60	与太郎内古墳群	古墳	古墳
61	荷渡古墳群	古墳	古墳
62	北山古墳群	古墳	古墳
63	北原古墳群	古墳	古墳
64	大六天遺跡	集落	古墳・奈良・平安
65	迎畑遺跡	集落	古墳・平安
66	地蔵堂Ｂ遺跡	集落・墳墓	古墳・近世
67	中村平遺跡	集落	古墳
68	大窪横穴墓群	古墳	古墳
69	羽山横穴墓群	古墳	古墳
70	浪岩横穴墓群	古墳	古墳
71	中谷地横穴墓群	古墳	古墳
72	西廻横穴墓群	古墳	古墳
73	西廻東廻横穴墓群	古墳	古墳
74	泉官衙遺跡	官衙	奈良・平安
75	横手廃寺跡	寺院	平安
76	真野古城跡	その他	平安
77	植松廃寺跡	寺院	平安
78	入道廻瓦窯跡	窯跡	平安
79	京塚沢瓦窯跡	窯跡	奈良・平安
80	犬這瓦窯跡	窯跡	平安
81	金沢製鉄遺跡群	製鉄	弥生・奈良・平安
82	割田製鉄遺跡群	製鉄	奈良・平安
83	蛭沢遺跡群	製鉄	奈良・平安
84	川内廻Ｂ遺跡群	製鉄	奈良・平安
85	出口遺跡	製鉄	平安
86	大塚遺跡	製鉄	平安
87	横大道遺跡	製鉄	奈良・平安
88	館腰遺跡	窯跡	奈良・平安
89	椴木沢Ｃ遺跡	製鉄	平安
90	東廻遺跡	製鉄	平安
91	広畑遺跡	集落	奈良・平安
92	上渋佐原田遺跡	集落	奈良・平安
93	桜井Ｄ遺跡	集落・散布地	古墳・奈良・平安
94	観音堂石仏	石仏	平安
95	薬師堂石仏附阿弥陀堂石仏	石仏	平安
96	別所舘跡	城館	中世
97	牛越城跡	城館	中世
98	村上城跡	城館	中世
99	小高城跡	城館	中世
100	泉平舘跡	城館	中世
101	泉館跡	城館	中世
102	下北高平舘跡	城館	中世
103	羽山岳の木戸跡	その他	近世
104	馬場遺跡	製鉄	近世
105	正福寺跡	墓	近世
106	法幢寺跡	墓	近世

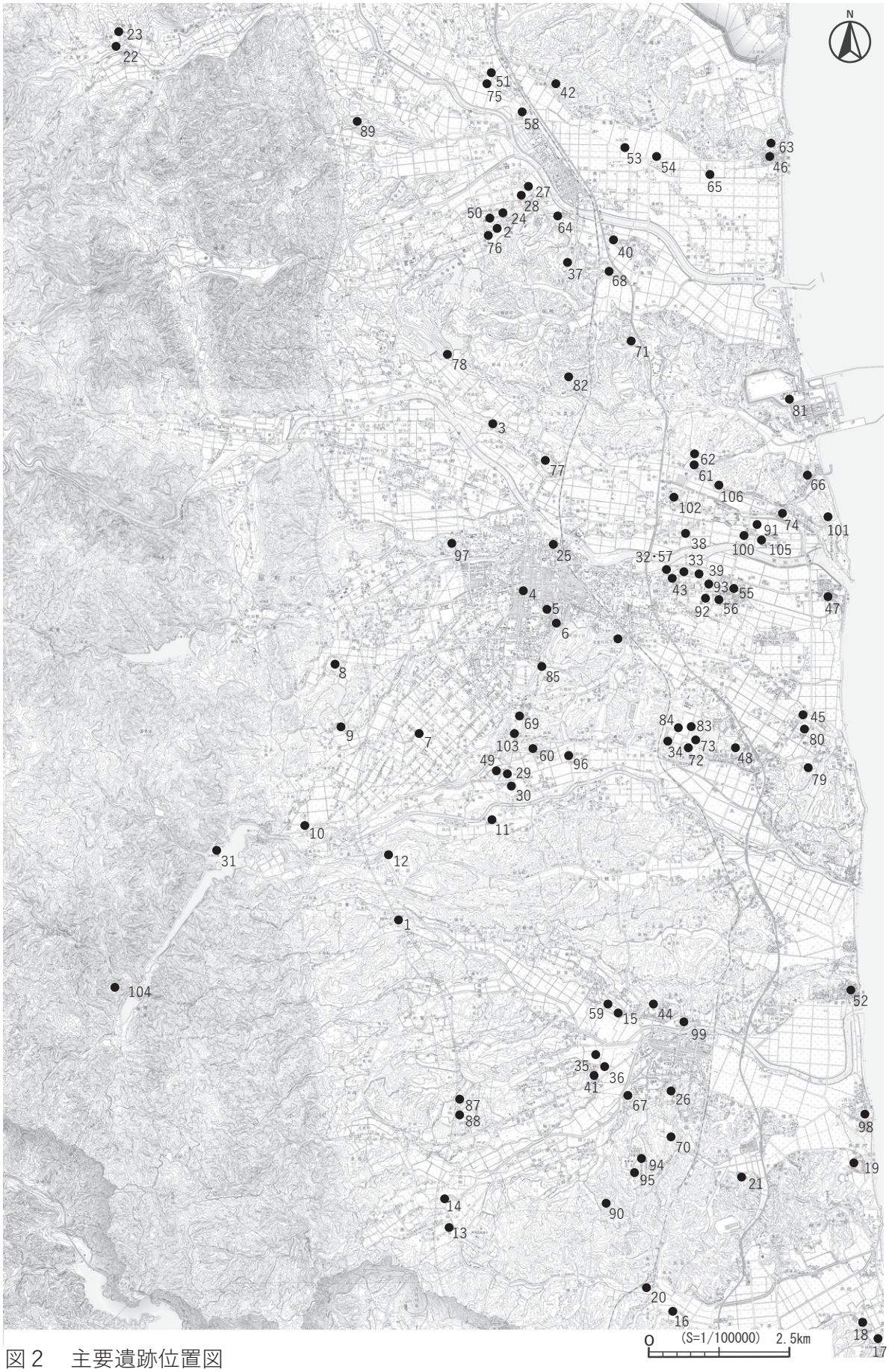

N
23
22
51
75
42
58
89
53
54
63
46
65
27
28
50
24
2
76
64
40
37
68
71
78
82
81
3
62
61
77
66
106
102
74
101
91
100
105
38
97
25
32・57
33
39
43
93
55
92
56
47
4
5
6
8
85
45
80
69
84
83
9
7
103
60
96
34
73
72
48
49
29
30
79
10
11
31
12
1
104
52
59
15
44
99
35
36
41
67
26
87
88
98
70
94
95
21
19
14
90
13
20
16
18
17
0
(S=1/100000)
2.5km

図２　主要遺跡位置図

第Ⅱ章　調査に至る経過

第１節　調査に至る経過

第１項　令和３年度試掘調査の経過

羽山岳の木戸跡は江戸時代に築造された野馬原を囲う野馬土手に伴う木戸跡である。昭和47（1972）年に市史跡に「羽山岳の木戸跡」として指定されている。野馬土手に伴う木戸跡としては現存する唯一のものであること、旧街道沿いにあり、石積であることから、重要視された木戸であったと考えられ、適切な保護が必要な史跡である。

これまでの調査として、平成19（2007）年に３次元測量（南相馬市教育委員会2007）、平面図作成（南相馬市教育委員会2008）が実施されている。

平成23（2011）年の東日本大震災において崩落はなかったものの、石垣のひずみが生じた。令和３（2021）年２月13日には、M7.3の2021年福島県沖地震が発生し、南相馬市原町区は震度５強を記録した。この地震により、東日大震災により生じた石垣のひずみが拡大し、修復等の必要性が生じた。このことから、修復前の基礎データを作成することを目的に同年３月３日に改めて３次元測量を行った。

測量調査後の同年３月20日に、M6.9の宮城県沖地震が発生し、南相馬市では震度５弱を観測した。この地震により、石垣の一部は崩落した。さらに崩落の危険性があったことから、一部石の除去を早急に行った。除去の際には、崩落前の測量成果をもとに、除去する各石に番号をつけ、写真等で記録しながら行った。また、除去後はさらなる崩落を防ぐため、ロープ等での崩落防止策を行った。同年５月からは、さらに崩落の危険性がある石の除去を実施した。

また、除去に伴い、修復方針を定めるために、積土の状況を確認する目的で、土手の一部を断ち割った調査を行った。これらの調査成果をもとに、令和４（2022）年３月には南相馬市の単独の経費負担により、石垣の修復を行った。修復後、応急措置等を施した機材や原位置に戻すことができなかった石材の撤収等を行った。

萱浜原畑遺跡４次調査は、個人住宅建設にともない令和３年５月１９日付けにて、開発予定地の試掘調査について（依頼）と埋蔵文化財発掘の届出の提出を受けて、試掘調査を実施した。令和３年６月２９日付に試掘調査の結果に基づき、福島県教育委員会に埋蔵文化財発掘の通知を進達し、令和３年７月19日付けにて福島県教育委員会から慎重工事を指示する内容の周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について（通知）が行われた。

羽山Ｂ遺跡は、令和３年５月24日付で開発予定地の試掘調査について（依頼）に基づき試掘調査を実施した。埋蔵文化財発掘の届出は、令和３年５月２４日付にて提出され、試掘調査の結果に基づき、令和３年７月５日付で福島県教育委員会に進達した。福島県教育委員会は令和３年７月26日付で、工事立ち会いを指示する周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等についての（通知）を行った。

第１項　令和３年度試掘調査の経過

片草南原遺跡４次調査は、令和３年５月２５日付で開発予定地の試掘調査について（依頼）、及び埋蔵文化財発掘の届出の提出を受け、令和３年６月１日に試掘調査を実施した。埋蔵文化財発掘の届出は試掘調査の結果に基づき、令和３年７月２１日付にて福島県教育委員会に進達し、福島県教育委員会は令和３年８月３０日付で、慎重工事を指示する周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について（通知）を行った。

松ヶ沢Ａ遺跡２次調査は、令和３年５月25日付で開発予定地の試掘調査について（依頼）と埋蔵文化財発掘の届出が提出されたことから試掘調査を実施し、令和３年８月１日付で試掘調査の結果に基づき埋蔵文化財発掘の届出を福島県教育委員会に進達した。福島県教育委員会は令和３年８月６日付で工事立会を指示する周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について（通知）を行った。

白幡前遺跡は令和３年６月28日付で、開発予定地の試掘調査について（依頼）が提出されたことにより、試掘調査を行った。埋蔵文化財発掘の届出は令和３年６月18日付にて提出され、試掘調査の結果に基づき福島県教育委員会に進達した。福島県教育委員会は令和３年８月27日付で周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について（通知）で、工事立会を指示する通知を行った。

真野古墳群Ｂ地区３次調査は、令和３年６月１０日付にて提出された開発予定地の試掘調査について（依頼）に基づいて実施された。

高見町Ｂ遺跡７次調査は、令和３年８月２日付にて提出された開発予定地の試掘調査について（依頼）の提出に基づき、令和３年８月２４日に試掘調査を実施した。埋蔵文化財発掘の届出は令和３年10月12日付にて提出され、福島県教育委員会は令和３年11月15日付にて工事立会を指示する周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について（通知）を行った。

東町遺跡５次調査は、令和３年８月７日付にて、開発予定地の試掘調査について（依頼）と埋蔵文化財発掘の届出の提出に基づいて実施した。令和３年９月１日付で試掘調査の結果に基づき埋蔵文化財発掘の届出を進達し、福島県教育委員会は令和３年９月１３日付にて慎重工事を指示する埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について（通知）を行った。

八幡林遺跡20次調査は、令和３年９月７日付にて提出された開発予定地の試掘調査について（依頼）の提出に基づき実施した。

荒神前遺跡10次調査は、令和３年８月10日付にて、開発予定地の試掘調査について（依頼）の提出、令和３年10月25日付にて埋蔵文化財発掘の届出が提出されたことから実施した。令和３年11月19日付にて、試掘調査の結果に基づき福島県教育委員会に埋蔵文化財発掘の届出を進達した。福島県教育委員会は令和３年11月26日付で慎重工事を指示する周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について（通知）を行った。

長野南原遺跡４次調査は、令和３年８月31日付にて、開発予定地の試掘調査について（依頼）が提出された。当該計画地は農地であったことから、令和３年９月24日付にて農地法第５条第１項に基づく農地一時転用許可申請を提出した。農地一時転用は令和３年10月15日付で許可され、令和３年12月から試掘調査を実施し、令和４年１月19日付にて農地転用事業の工事

進捗状況（完了）を提出した。

北原田B遺跡は、令和3年11月16日付にて、開発予定地の試掘調査について（依頼）の提出を受けて実施した。埋蔵文化財発掘の届出は、令和3年12月8日付にて提出され、試掘調査の結果に基づき令和4年1月5日付にて、福島県教育委員会に進達を行った。福島県教育委員会は令和4年1月11日付にて慎重工事を指示する周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について（通知）を行った。

北原貝塚は、これまでに自然崩落に伴う1次調査（小高町教育委員会2004）などの調査が実施されている。貝層の一部は昭和46（1971）年に小高町指定史跡（現南相馬市指定史跡）に指定されている。

今回の試掘調査は、令和3年度に福島県教育委員会が実施した調査（福島県教育委員会2023）の追加調査である。福島県教育委員会の令和3年度調査では、遺跡の西側斜面について、縄文時代の遺物包含層等を確認し、要保存範囲が設定された（図35）。当調査において検出された遺物包含層等は、1次調査地点において確認した縄文時代前期の貝層との関連も考えられ、隣接する国史跡浦尻貝塚の前段階の形成であること、貝層の一部は市史跡に指定されているから、将来にわたり指定等の措置により保存を要する可能性も想定された。しかし、この調査では遺物包含層の厚さ、内容等について十分確認するまでは至らなかった。また、要保存範囲隣接する要試掘調査区域があり、早急な保存協議を行う上で、十分な情報量が不足していた。このことから、相双建設事務所、福島県教育委員会と協議したところ、南相馬市教育委員会で、追加の保存協議資料を得るための調査を実施することとなった。

西廻東迫横穴墓群については、令和4年1月5日付にて開発予定地における試掘調査について（依頼）の提出を受けて実施し、令和4年2月17日付にて開発予定地の埋蔵文化財試掘調査の結果について（中間報告）を提出した。

反町遺跡は令和4年2月7日付にて開発予定地の試掘調査について（依頼）の提出に基づき実施した。埋蔵文化財発掘の通知は、令和4年11月11日付にて提出され、試掘調査の結果に基づき令和4年11月21日付にて福島県教育委員会に進達した。福島県教育委員会は、令和4年11月29日付で工事立会を指示する周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等ついて（通知）を行った。

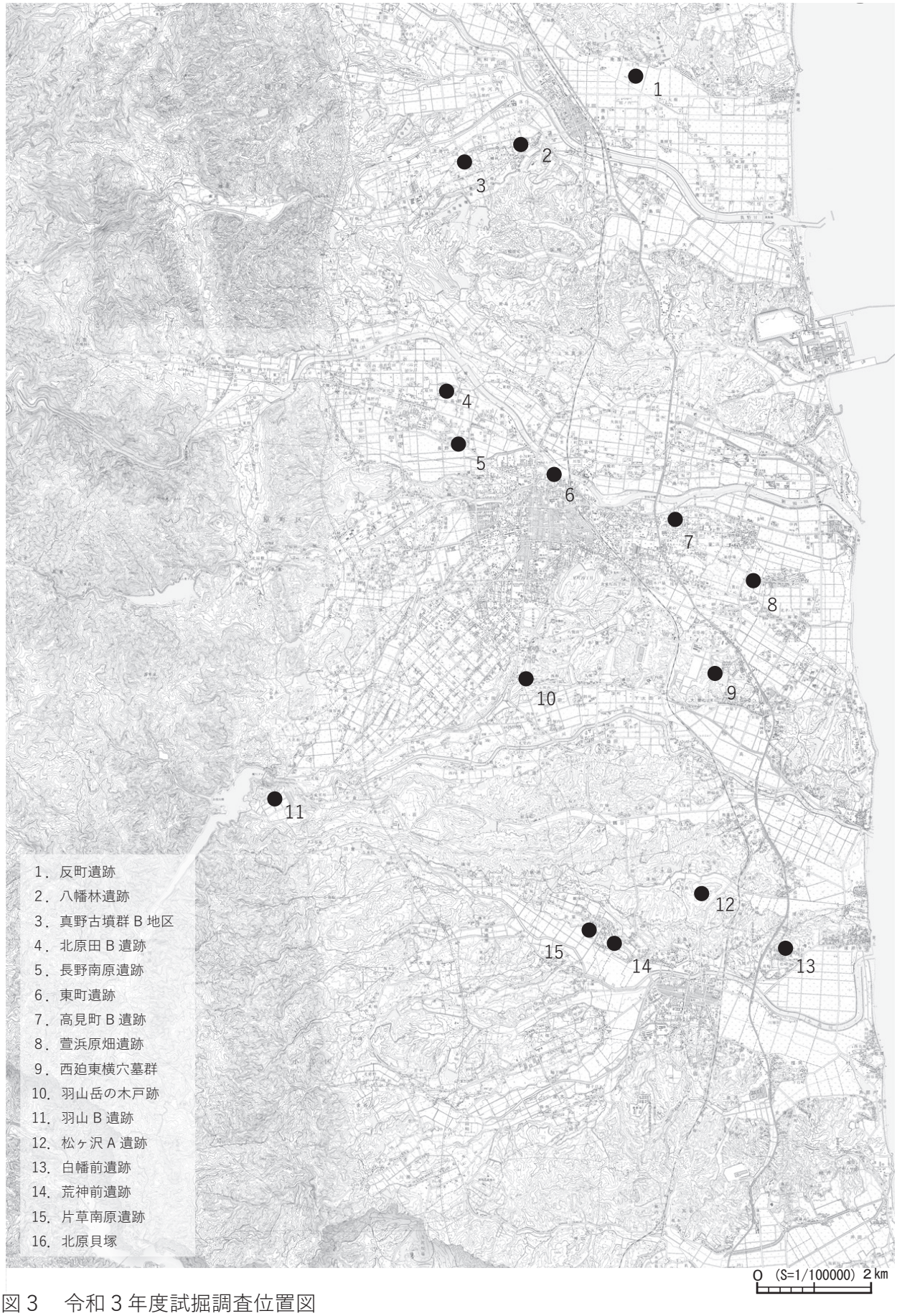


図３　令和３年度試掘調査位置図

第Ⅲ章　調査成果

第１節　令和３年度試掘調査成果

第１項　羽山岳の木戸跡（３次調査）

１．調査原因　自然崩落
２．調査地点　南相馬市原町区上太田字新橋
３．調査期間　令和３年３月３日、令和３年５月 17 日～５月 31 日、
　　令和４年３月９日～３月１１日
４．調査面積　12 ㎡
５．調査担当
　課長補佐兼埋蔵文化財担当係長　川田強
　主任文化財主事　佐川久
　埋蔵文化財調査員　濱須脩
６.調査成果

　野馬土手は当該部分では街道に沿って南北に延伸していたものが、木戸周辺で東側にゆるく屈曲し、東側の現道に直行するように構築されている。石垣は北面では約 11 m、南面では約２m確認される。ただし、北面では西側約２mは石垣が残存せず、裏込め石のみ認められる。石垣は落とし積みで構築されており、石材は自然石のほか、一部を荒く調整し、面を抽出するなど加工された石材も多い。

　石垣部は東端で上端幅 2.7 m、下端幅 3.1 m、高さ 1.4 mを図る。野馬土手の断面形は通常、上端幅 1.8 m、下端幅 5.4 m、高さが 1.8 mであり、左右非対称である。一方、羽山岳の木戸跡の石垣部は幅がせまく、高さが低い。断面形も左右対称の台形を呈するなど、通常の野馬土手と形状は大きく異なる。ただし、本調査地点の南側は建物等により土手を壊している部分が大きいと考えられ、SPC － D の断面形では石垣面の反対側とな

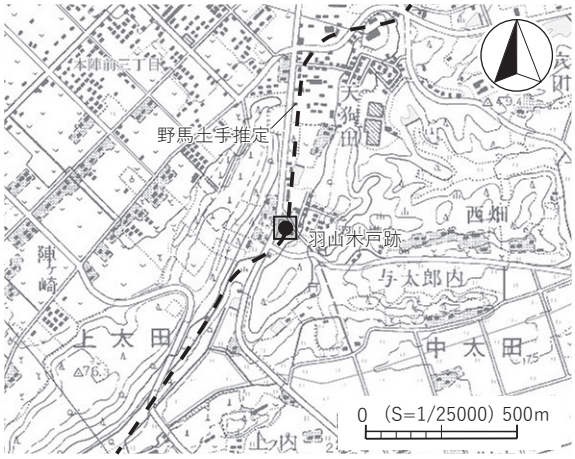


図４　羽山岳の木戸跡位置図

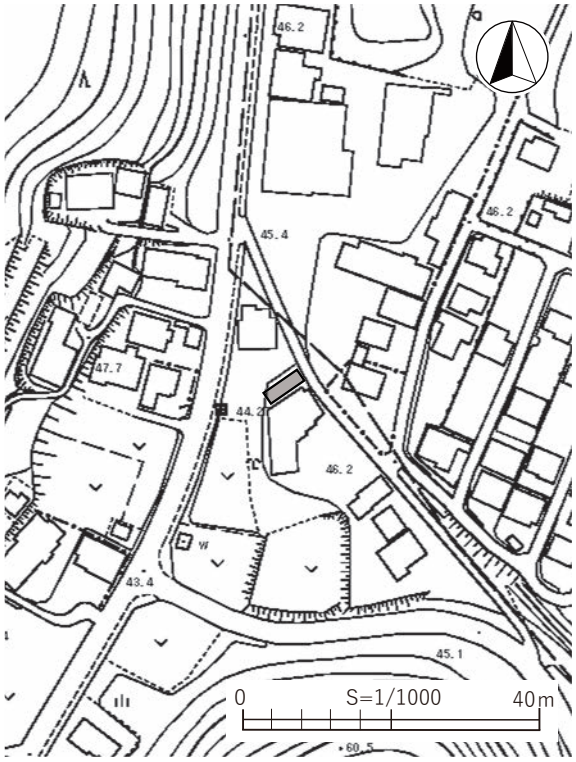


図５　測量範囲位置図

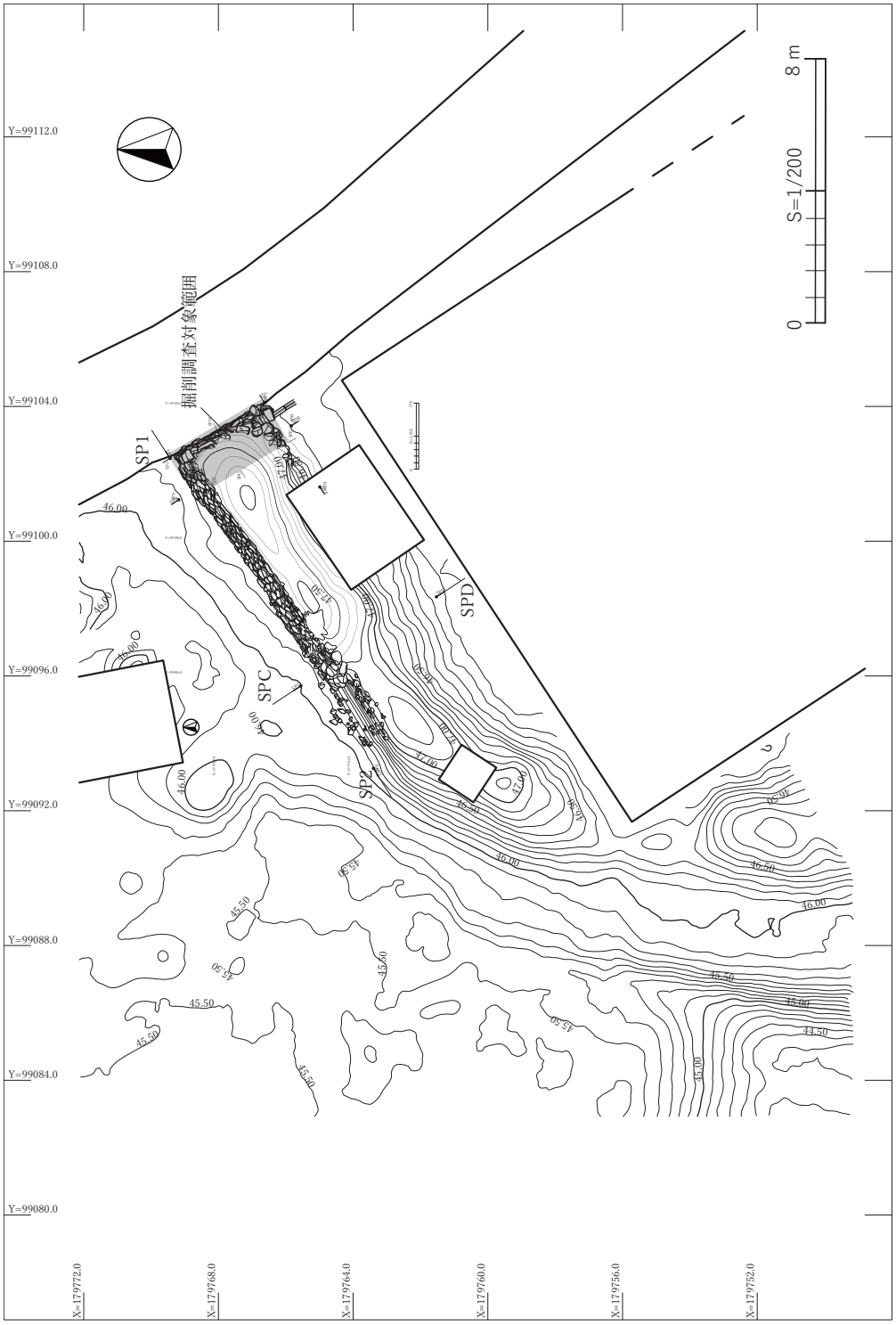

0
S=1/200
8 m
掘削調査対象範囲
SP1
SP2
SPC
SPD
Y=99112.0
Y=99108.0
Y=99104.0
Y=99100.0
Y=99096.0
Y=99092.0
Y=99088.0
Y=99084.0
Y=99080.0
X=179772.0
X=179768.0
X=179764.0
X=179760.0
X=179756.0
X=179752.0

図６　石垣部平面図

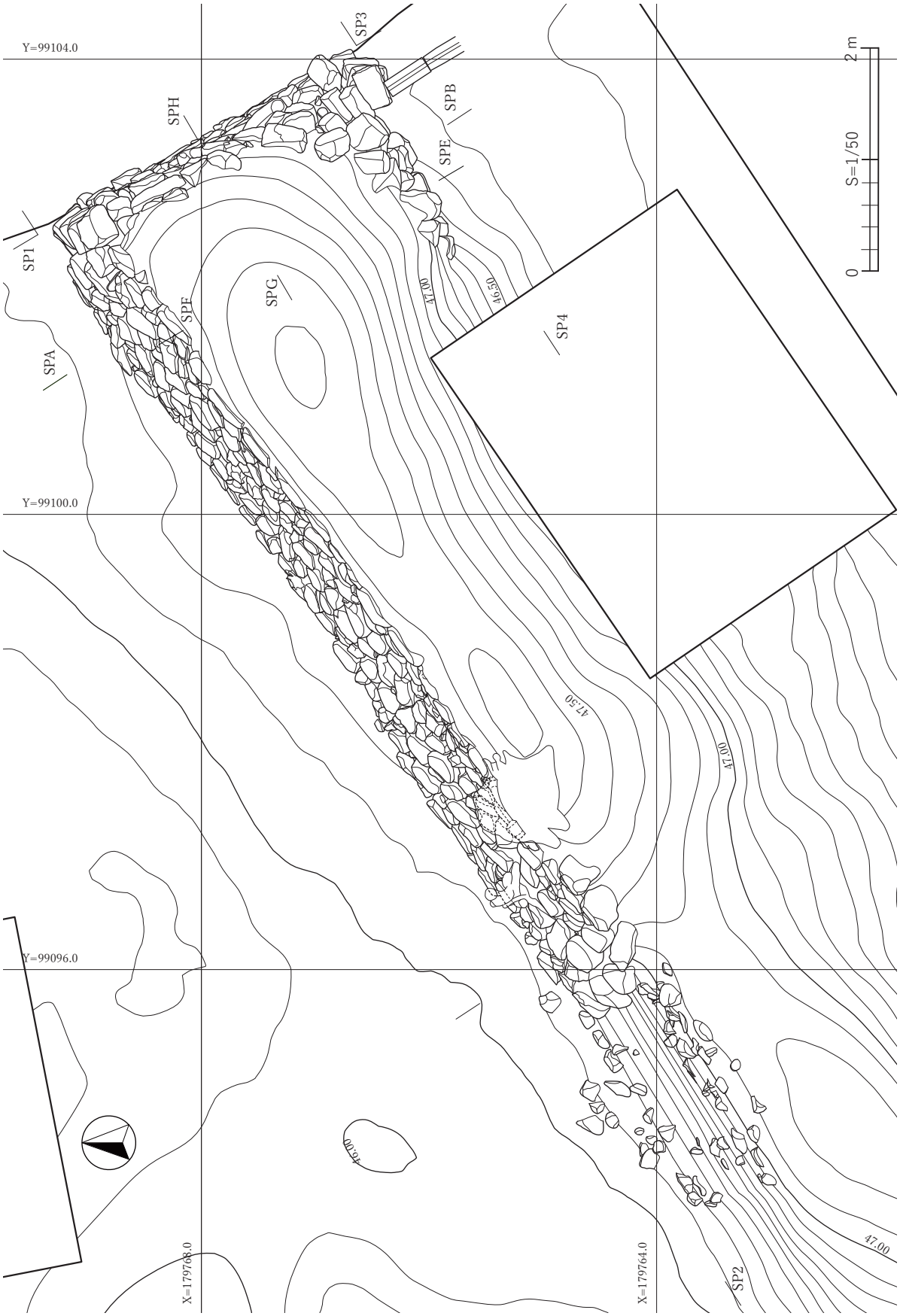

Y=99104.0
Y=99100.0
Y=99096.0
X=179768.0
X=179764.0
SP1
SP2
SP3
SP4
SPA
SPB
SPE
SPF
SPG
SPH
46.50
47.00
47.50
46.00
0
S=1/50
2 m

図７　石垣部平面図

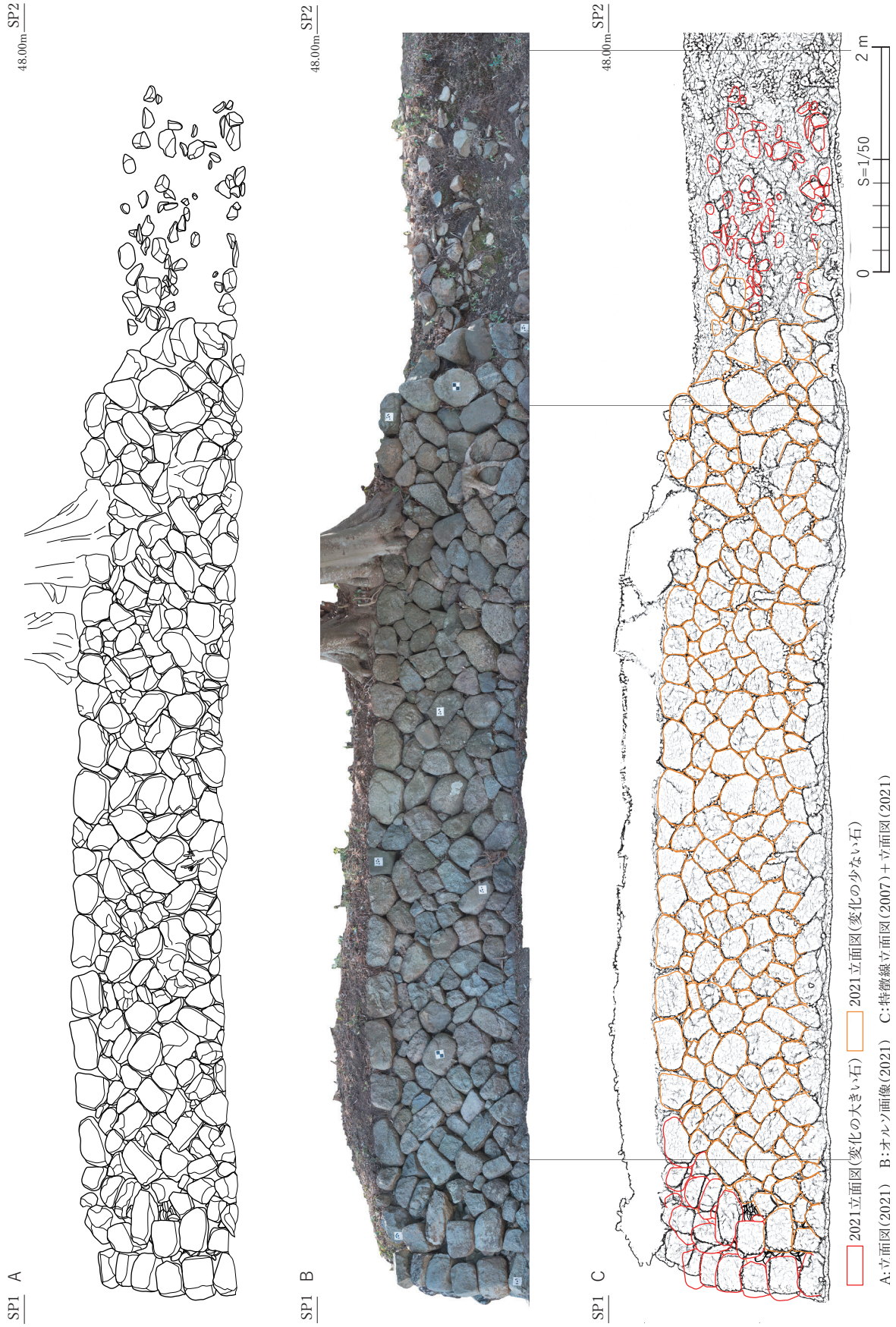
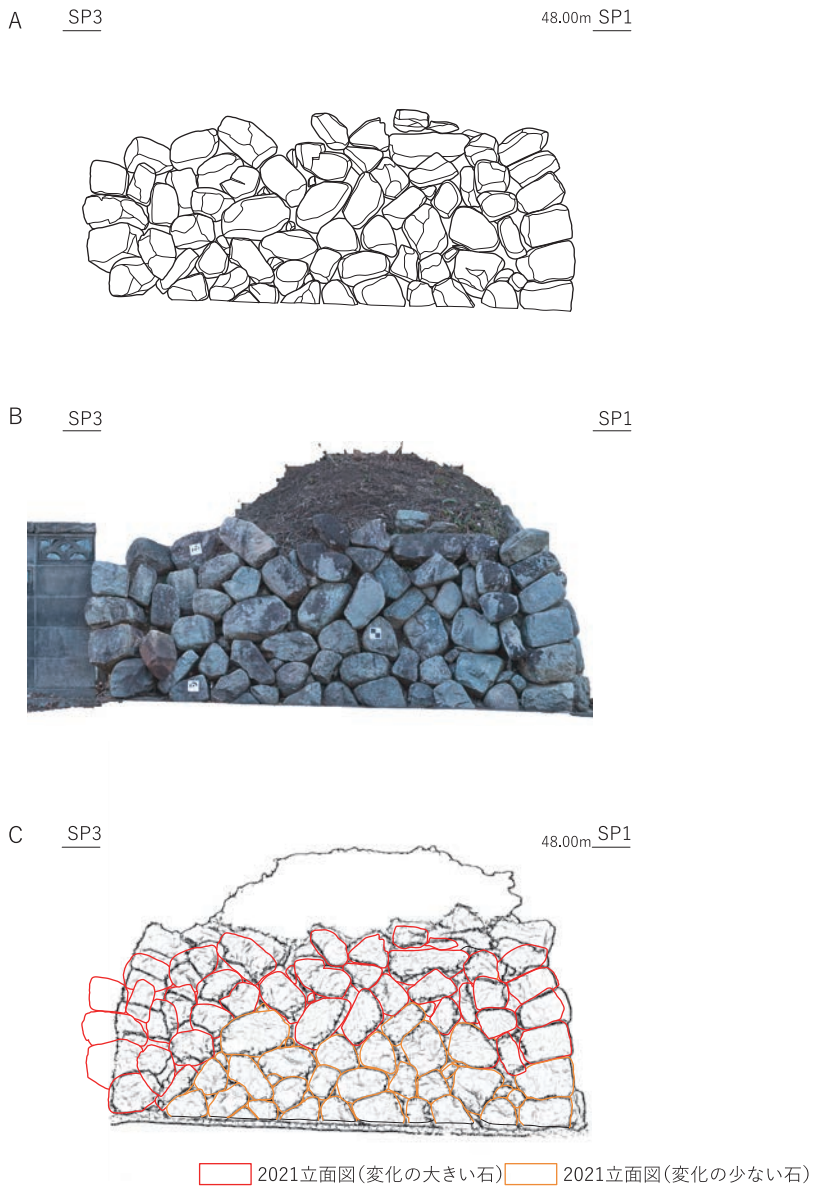

SP1 A
SP2
48.00m
SP1 B
SP2
48.00m
SP1 C
SP2
48.00m
0
S=1/50
2 m
2021立面図(変化の大きい石)
2021立面図(変化の少ない石)
A:立面図(2021)　B:オルソ画像(2021)　C:特徴線立面図(2007)＋立面図(2021)

図８　石垣部立面図（北面）

る南側は著しく高さがなく、削平されたと考えられる。

2007 年と 2021 年の 3 次元測量調査を比較すると（図８・９）、北面では東側の端部、特に上位が大きくずれていることが認められる。また、裏込石が露出している箇所は裏込石の崩落が進んでいることが確認できる。一方、東日本大震災等度重なる地震があったにも関わらず、これらを除き、北面中央部は石垣面が安定した状態であることが確認できる。この安定した箇所については、上部に天端石があり、崩れた東端には天端石が失われている。この天端石がないことが崩落の一要因と考えられる。

また、北面では上部に樹木があるが、この樹木の影響による石垣面の変化は大きくなかった。樹木による影響が全くないとは言えないものの、樹木が石垣面の崩落を緊急的に引き起こすも



A:立面図（2021）　B:オルソ画像（2021）　C:特徴線立面図（2007）+立面図（2021）

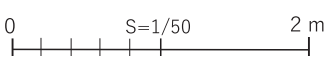


図９　石垣部立面図（東面）

のではないと考えられる。

東面では両端と上部に大きなずれが生じている。東面は石垣の端部にあたり、最もひずみが生じやすいと考えられる。2007 年の測量記録がないものの、南面も大きく崩れたことは写真の比較から確認できる。南面は建物に接しており、近代以降の人為的改変も多かったと考えられる。これらはいずれも天端石が失われていると考えられる。2021 年の測量調査後の宮城県沖地震による崩落は、この 2007 年から 2021 年において変化の大きな部分において起こっている。

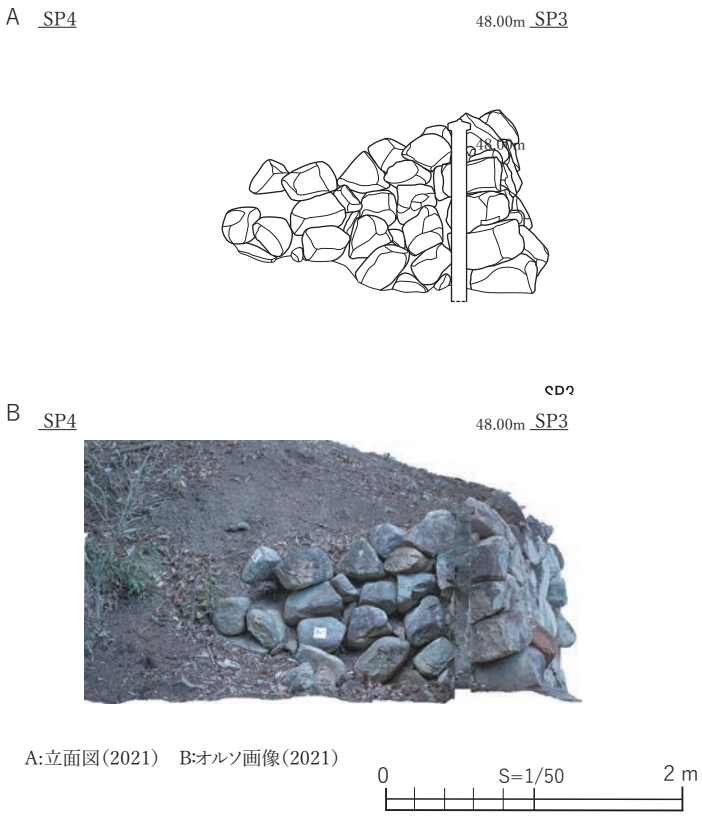


図 10　石垣部立面図（南面）

2021 年宮城県沖地震の崩落後、ずれが生じた石を除去し、土手の断ち割り調査を行った（図６・12）。１～ 10 層は締まりが極めて弱く、空缶などの近代の遺物が含まれていることから、近代の石垣修復の際の埋土と考えられる。黒色を基調とする 20・21 層は土手構築前の旧表土である。11 ～ 19 層は黒色を基調としながらも、ローム粒、ロームブロックを多く含み、淘汰が悪いことから、人為的な積土層と考えられる。中央部に落ち込んだ堆積がみられることから、中央部を浅く掘り込み、その後構築した可能性が指摘できる。

このことから、今回崩落した東端部は少なくとも昭和時代後期に修復が行われており、中央部下位のみ構築時の積土層が残されているものと考えられる。よって、今回崩落した石垣面はほぼ、近代の修復によるもので、江戸時代の本来の石垣面は根石付近を除き、残存していないものと判断された。なお、所有者等に修復についての聞き取りを行ったが、修復時期等について明確にすることはできなかった。

断ち割り調査後、石除去部には土嚢で養生を施す応急措置を行った。これらの調査成果をもとに、石垣の修復を令和４（2022）年３月１日～４日まで実施している。修復にあたっては、崩落した石垣面が近代の所産であること、安全面に配慮する必要があることを前提とし、2007･2021 測量成果をもとにできるだけ原位置に復元を行った。修復後の同年３月 16 日には、M7.4、南相馬市原町区は震度６弱を観測する 2022 年福島県沖地震が発生した。その際には幸いにも石垣の崩落は発生しなかった。

７．調査所見

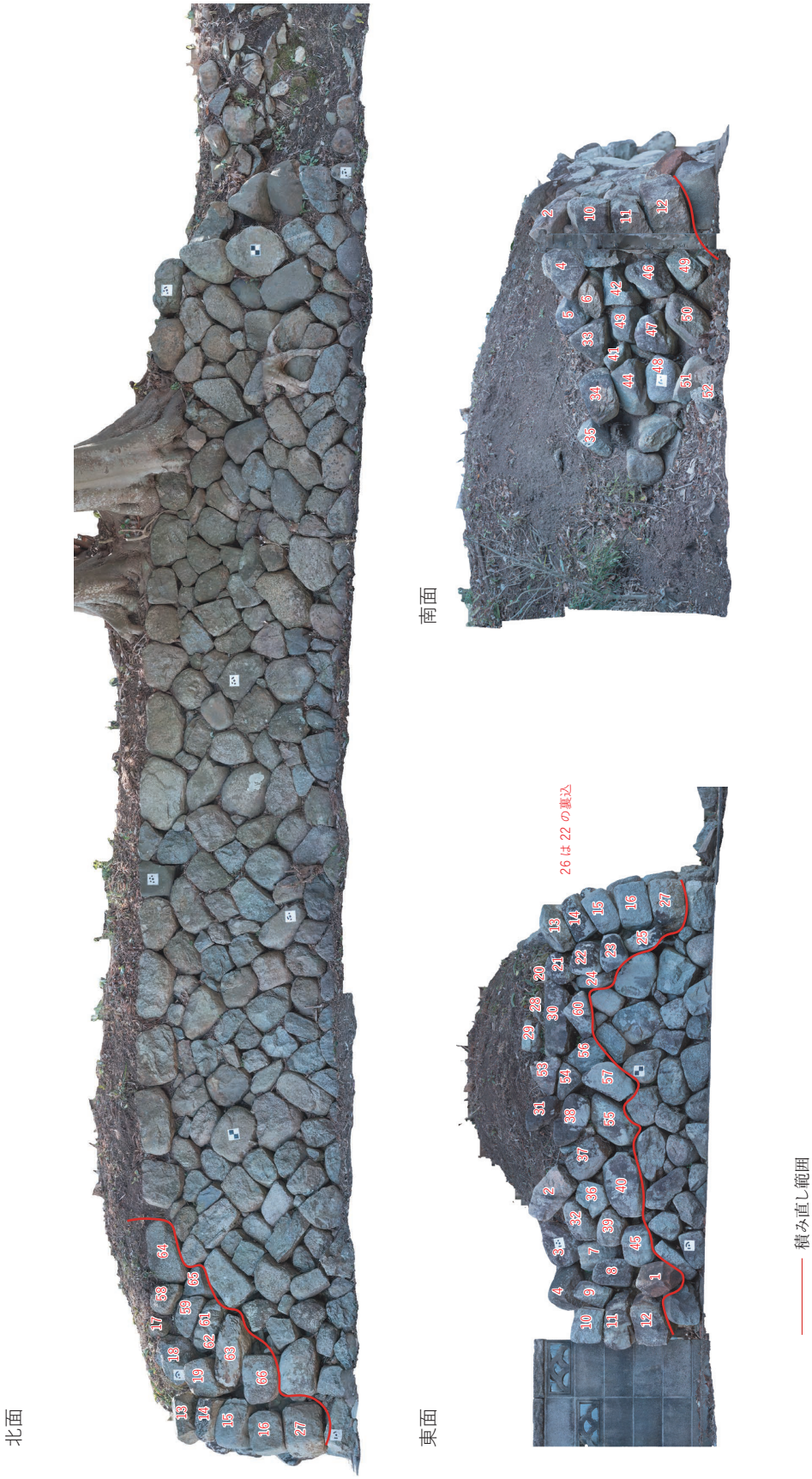


図 11　修復範囲図

東日本大震災から 2021 年宮城県沖地震までの地震被害は、主に石垣の東面・南面が中心であった。崩落した箇所は天端石がなく、このことら、ゆがみが生じつつあったところに地震による崩落が起きたと考えられる。しかし、崩落しなかった北面石垣については、2007 年以降、度重なる地震を経ながらも、大きなずれが生じず、安定した状態であることが確認された。これらのことは各時期に３次元測量を行っていたことにより、容易に確認することができることであり、３次元測量が石垣の保存検証について有効であることが改めて指摘できる。また、測量成果は、石垣の修復においても重要な基礎資料となった。さらに、あまり記録することがない裏込め石の露出部分も時間的経過により大きく崩れてきていることが判明し、今後の保存についての別の課題を認識することができたのも３次元測量の成果といえる。

また、修復前に行った断ち割り調査により、今回の崩落部分は石垣が過去に修復された箇所であることが確認された。このことから、石垣を正確な構築時の復元ではなく、原位置に戻すことを前提としながらも、安全面を重視した修復とすることを基本方針とした。どの段階の石垣に修復するのかを決定することについては、安全面だけではなく、経費・労力も大きく左右する。これらも基礎となる遺跡の情報を確認することが重要であり、修復時の調査は必須であるともいえよう。

今回の調査を踏まえ、今後の市指定史跡として適切に保存していくこととして、次のことが必要と考えられる。

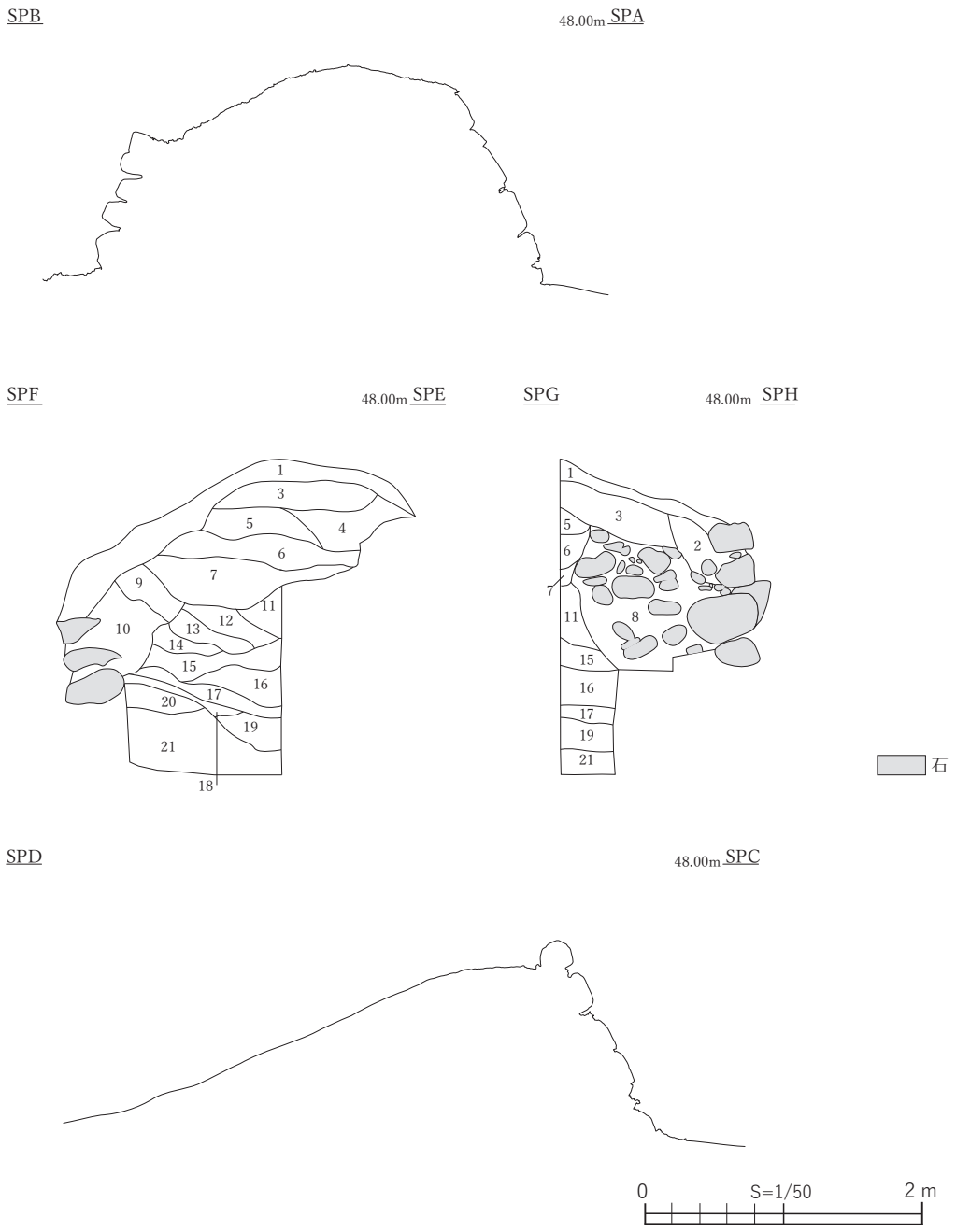
・天端石がないところに天端石を設置し、石垣を安定させること。
・裏込め石の露出部分は、これ以上の崩落を防ぐため、盛土等の養生が必要であること。
・経年変化を確認するため、定期的な３次元測量を行うこと。

これらのことは、今後も予想される災害への対応であるとも言えよう。

参考文献

南相馬市教育委員会(2007)南相馬市内遺跡発掘調査報告書３－平成 17･18 年度試掘調査報告―,南相馬市埋蔵文化財調査報告書第８集

南相馬市教育委員会（2008）南相馬市内遺跡発掘調査報告書４－平成 19 年度試掘調査報告―,南相馬市埋蔵文化財調査報告書第 10 集



土層説明

1　黒褐色土　10YR2/3　粘性弱　しまり弱
2　黒褐色土　10YR2/2　粘性弱　しまり弱　ロームブロック粒微　レキ多量
3　黒褐色土　10YR2/2　粘性弱　しまり弱
4　黒褐色土　10YR2/2　粘性弱　しまり弱　ロームブロック粒多　レキ少量
5　黒褐色土　10YR2/2　粘性弱　しまり弱　ロームブロック粒少
6　黒色土　10YR2/1　粘性弱　しまり弱　ローム粒微　ロームブロック微
7　黒褐色土　10YR2/3　粘性弱　しまり弱　ローム粒中　ロームブロック微
8　黒褐色土　10YR2/3　粘性弱　しまり弱　ロームブロック粒多　ロームブロック多　レキ多
9　黒褐色土　10YR2/2　粘性弱　しまり弱　ロームブロック少
10　黒褐色土　10YR2/2　粘性弱　しまり弱　レキ少
11　黒褐色土　10YR2/3　粘性弱　しまり弱　ローム粒少　ロームブロック微
12　黒褐色土　10YR2/3　粘性弱　しまり弱　ローム粒少　ロームブロック多
13　黒褐色土　10YR3/2　粘性弱　しまり弱　ローム粒多　ロームブロック多
14　黒褐色土　10YR3/1　粘性弱　しまり中　ローム粒多　ロームブロック微
15　黒褐色土　10YR3/2　粘性弱　しまり中　ローム粒多　ロームブロック多
16　黒褐色土　10YR3/2　粘性弱　しまり強　ローム粒微　ロームブロック多
17　黒褐色土　10YR2/2　粘性弱　しまり強　ローム粒微　ロームブロック多
18　黒褐色土　10YR3/2　粘性弱　しまり強　ローム粒少　ロームブロック少
19　黒褐色土　10YR3/2　粘性弱　しまり強　ローム粒微　ロームブロック多
20　黒色土　10YR2/1　粘性中　しまり中　ローム粒多　ロームブロック多
21　黒色土　10YR2/1　粘性中　しまり中　ローム粒少

図 12　断面図

写真１　宮城県沖地震被害状況（東面）

写真２　宮城県沖地震被害状況（東面）

写真３　宮城県沖地震被害状況（南面）

写真４　宮城県沖地震被害状況（北面）

写真５　石取り上げ後状況１

写真６　石取り上げ後状況２

写真７　石取り上げ後状況３

写真８　石取り上げ後状況４

写真 9　調査状況 1

写真 10　調査状況 2

写真 11　土手断面（E-F)1

写真 12　土手断面（E-F)2

写真 13　土手断面（G-H)1

写真 14　土手断面（G-H)2

写真 15　掘削作業完了状況 1

写真 16　掘削作業完了状況 2

写真 17　応急措置状況

写真 18　復元作業状況 1

写真 19　復元作業状況 2

写真 20　復元作業状況 3

写真 21　復元作業状況 4

写真 22　復元完了（南面）

写真 23　復元完了（北面）

写真 24　復元完了（東・北面）

第２項　萱浜原畑遺跡（４次調査）

１．調査原因：個人住宅の建築
２．所 在 地：南相馬市原町区萱浜字原ノ山
３．調査期間：令和３年６月９日
４．対象面積：223 ㎡
５．調査面積：　18 ㎡
６．調査担当：埋蔵文化財調査員　濱須 脩
７．調査成果：調査対象範囲内に長さ９ｍ×幅２ｍの調査区１箇所を設定して、埋蔵文化財の有無を確認した。試掘調査では、現地表面から約１～1.2 ｍの深さで基盤層に達した。基盤層上面を確認する過程では、遺構・遺物等の埋蔵文化財は確認されなかった。
８．調査所見：今回の試掘調査では、保存協議を要する埋蔵文化財は確認されなかったことから、改めた保存協議の必要はないが、工事施工にあたっては慎重工事により対応することが望ましい。

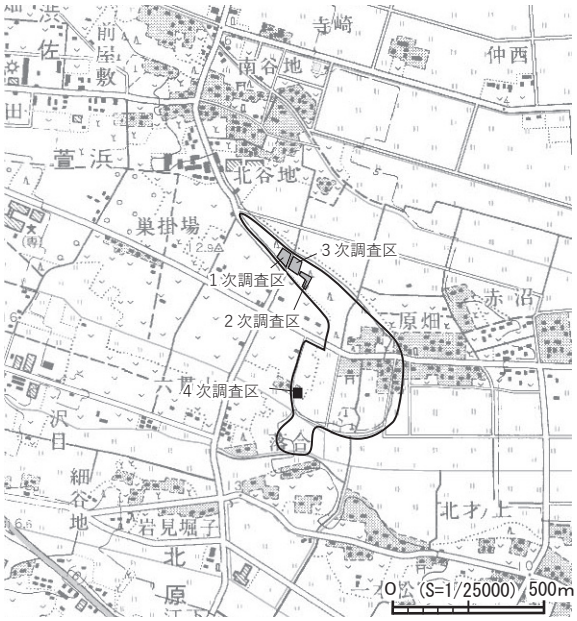


図 13　萱浜原畑遺跡位置図

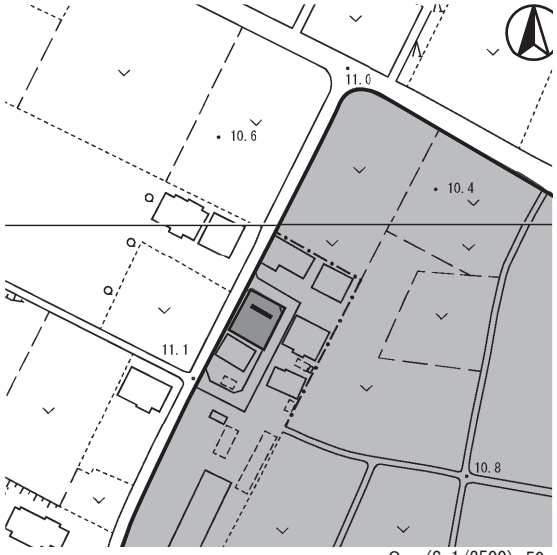


図 14　調査区位置図

写真 25　１Ｔ調査状況

写真 26　土層断面

第３項　羽山Ｂ遺跡

1．調査原因：太陽光発電設備の建設
2．所 在 地：南相馬市原町区片倉字羽山
3．調査期間：令和３年６月 10 日
4．対象面積：1158 ㎡
5．調査面積：　　２㎡
6．調査担当：埋蔵文化財調査員　濱須 脩
7．調査成果：調査対象範囲内に１ｍ四方の調査区１箇所を設定して、埋蔵文化財の有無を確認した。

　試掘調査では、現地表面から約 50 ㎝の深さで基盤層に達した。現地表面から基盤層までの堆積土は造成による盛土であり、基盤層上面を確認する過程では、遺構・遺物等の埋蔵文化財は確認されなかった。

8．調査所見：今回の調査では、埋蔵文化財は確認されなかったことから、保存協議は不要であるが、周知の埋蔵文化財包蔵地内のおける工事であることから、工事の際には埋蔵文化財担当職員の立ち会いの下で施工されることが望ましい。

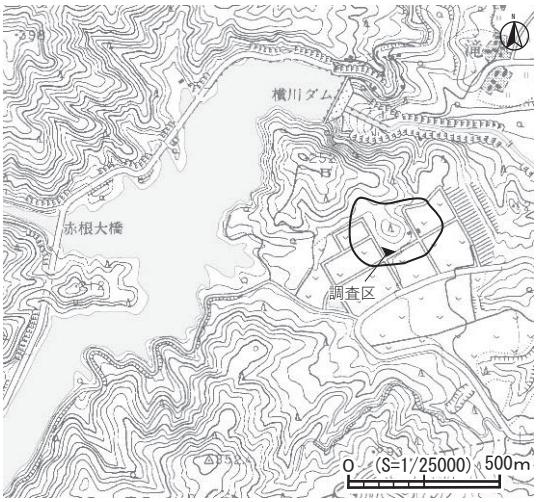


図 15　羽山Ｂ遺跡位置図

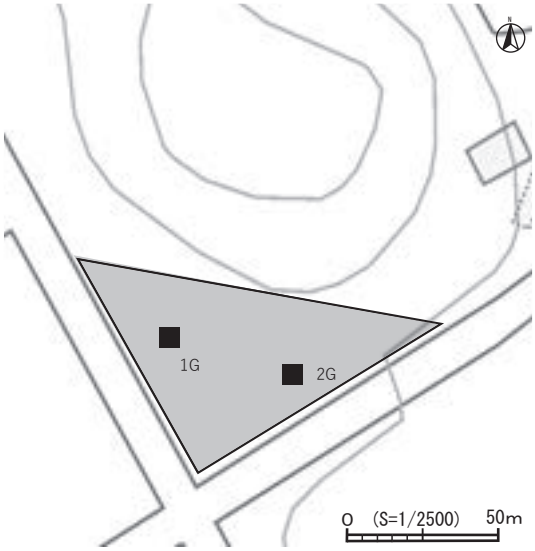


図 16　調査区位置図

写真 27　１Ｇ調査状況

写真 28　２Ｇ調査状況

第４項　片草南原遺跡（４次調査）

1．調査原因：太陽光発電設備の建設
2．所 在 地：南相馬市小高区片草字南原
3．調査期間：令和３年６月 10 日
4．対象面積：989 ㎡
5．調査面積：　14 ㎡
6．調査担当：埋蔵文化財調査員　濱須 脩
7．調査成果：調査対象範囲内に７ｍ×２ｍの調査区１箇所を設定して、埋蔵文化財の有無を確認した。試掘調査では、現地表面から約 45 ～ 75 ㎝の深さで基盤層に達した。ＬＩは造成による盛土層で、その下層で基盤層となる黄色ソフトロームに達した。

　基盤層を確認する過程では、遺構・遺物等の埋蔵文化財は確認されなかった。

8．調査所見：今回の試掘調査では、保存協議を要する埋蔵文化財は確認されなかったことから、改めた保存協議の必要はないが、工事施工にあたっては慎重工事により対応することが望ましい。

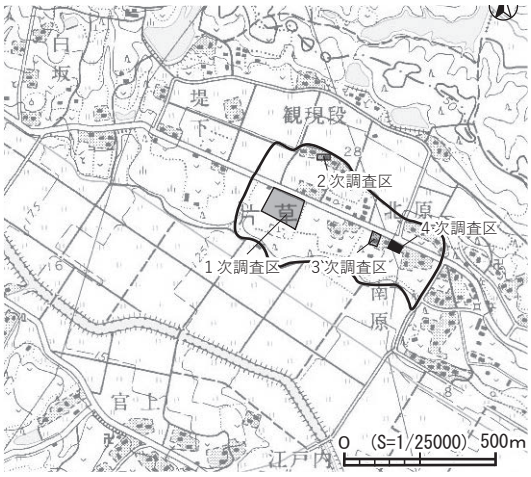


図 17　片草南原遺跡位置図

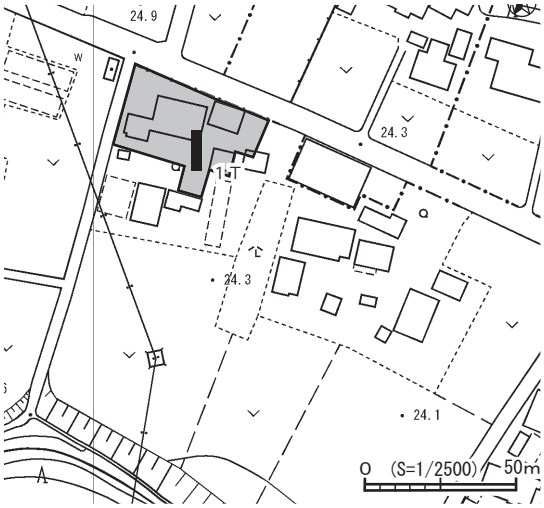


図 18　調査区位置図

写真 29　調査状況

写真 30　土層断面

第５項　松ヶ沢Ａ遺跡（２次調査）

１．調査原因：太陽光発電設備の建設

２．所 在 地：南相馬市原町区小木廻字松ヶ沢

３．調査期間：令和３年６月 15 日～７月 15 日

４．対象面積：49,698 ㎡

５．調査面積：　132.4 ㎡

６．調査担当：埋蔵文化財調査員　濱須 脩

７．調査成果：調査対象範囲内に幅１ｍの調査区を 42 箇所に設定して、埋蔵文化財の有無を確認した。試掘調査では、廃滓場１箇所と木炭焼成土坑１基が確認された。廃滓場は東向きに開析した谷頭部分にあり、26 ～ 28 Ｔ・30 Ｔで確認した。木炭焼成土坑は廃滓場のある谷の北側の谷に設定した 39 Ｔで確認した。廃滓場は鉄滓が分布する範囲を保存協議対象範囲とするが、39 Ｔで確認した木炭焼成土坑については、確認調査で記録作成まで行ったことから、保存協議の対象からは除外することとした。

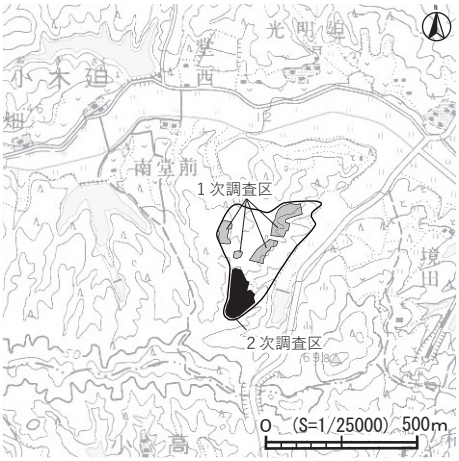


図 19　松ヶ沢Ａ遺跡位置図

８．調査所見：今回の調査では、開発対象地内で廃滓場が所在していることから、確認された埋蔵文化財の保護が困難な場合には、記録保存のための発掘調査を要する。

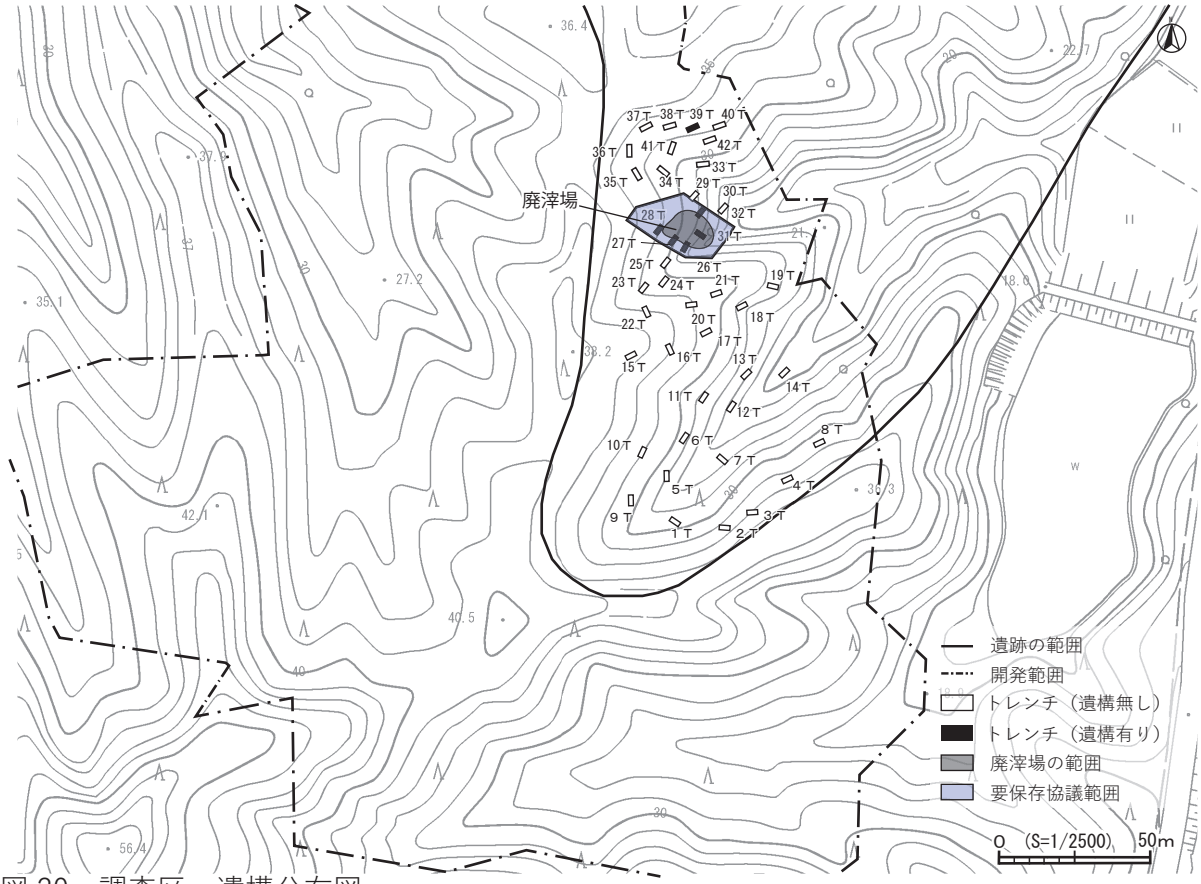


図 20　調査区・遺構分布図

写真 31　27 T 廃滓場南端

写真 32　28 T 廃滓場西端

写真 33　31 T 廃滓場中央

写真 34　30 T 廃滓場北端

写真 35　39 T 木炭焼成土坑検出状況

写真 36　39 T 木炭焼成土坑完掘状況

第６項　白幡前遺跡（３次調査）

１．調査原因：太陽光発電設備の建設
２．所 在 地：南相馬市小高区大井字上山畑
３．調査期間：令和３年７月 20・21 日
４．対象面積：490 ㎡
５．調査面積：　30 ㎡
６．調査担当：埋蔵文化財調査員　濱須 脩
７．調査成果：調査対象範囲内に、長さ 15 ｍ×幅２ｍの規模の調査区を設定して、埋蔵文化財の確認作業を行った。試掘調査では、現地表面から約 40 ～ 50 ㎝の深さで黄色ロームの基盤層に達し、基盤層確認までの堆積土は暗褐色の畑地耕作土である。基盤層を確認するまでの過程の中では、少量の土器片が出土したが、いずれも畑地耕作土に含まれており、基盤層上面からは時期不明の幅１ｍ前後の溝跡２条を確認した。
８．調査所見：今回の試掘調査では、２条の溝跡と少量の土器片が出土したものの、本工事においては確認された遺構への影響は極めて軽微と判断されることから、工事の際には埋蔵文化財担当職員の立ち会いの下で施工されることが望ましい。

図 21　白幡前遺跡位置図

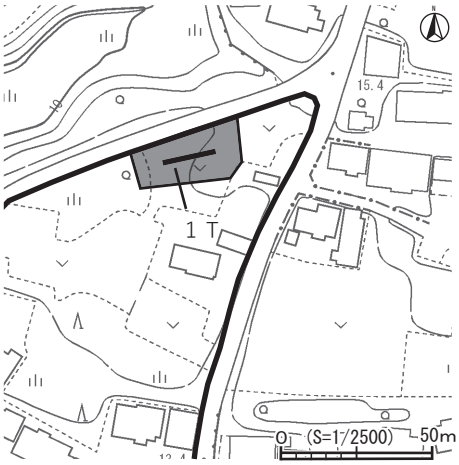


図 22　調査区位置図

写真 37　調査状況

写真 38　土層断面

第７項　真野古墳群Ｂ地区（３次調査）

１．調査原因：個人住宅の建設
２．所 在 地：南相馬市鹿島区小池字長沼
３．調査期間：令和３年７月 28・29 日
４．対象面積：574 ㎡
５．調査面積：　40 ㎡
６．調査担当：南相馬市博物館　主査　荒 淑人
７．調査成果：調査対象範囲内に、長さ 10 m×幅２m の規模の調査区を２か所に設定して、埋蔵文化財の確認作業を行った。試掘調査では、現地表面から約１～ 1.2 mの深さで黄色ロームの基盤層に達した。

　２Ｔでは時期不明の竪穴住居跡の北西コーナーと考えられる遺構を確認したが、１Ｔでは明らかな遺構は確認できなかった。また基盤層に達するまでの堆積土からは３点の土師器片が出土した。

８．調査所見：今回の試掘調査では、竪穴住居跡の一部と思われる遺構と、土師器片が３点出土したことから、本工事において建物基礎が基盤層に達する計画の場合には、保存協議を要する。

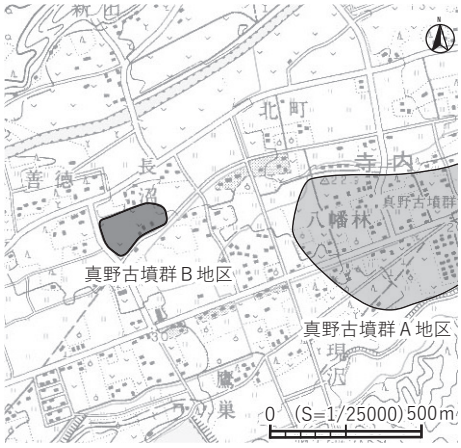


図 23　真野古墳群Ｂ地区位置図

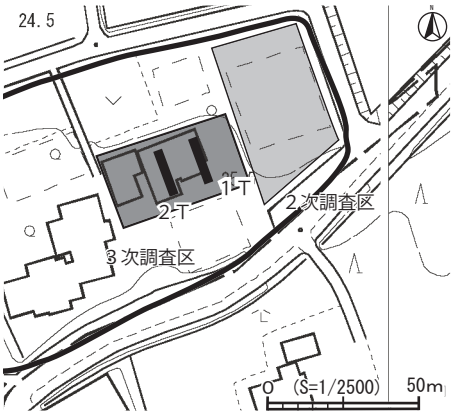


図 24　調査区位置図

写真 39　１Ｔ調査状況

写真 40　２Ｔ調査状況

第８項　高見町Ｂ遺跡（７次調査）

１．調査原因：建売分譲
２．所 在 地：南相馬市原町区高見町一丁目
３．調査期間：令和３年８月 24 日
４．対象面積：495 ㎡
５．調査面積：　26 ㎡
６．調査担当：埋蔵文化財調査員　濱須 脩
７．調査成果：調査対象範囲内に、長さ７ｍ×幅２ｍの調査区と長さ６ｍ×幅２ｍの調査区を設定して、埋蔵文化財の確認作業を行った。試掘調査では、現地表面から約 0.4 ～ 0.75 ｍの深さで黄色ロームの基盤層に達した。基盤層確認までの堆積土は、ＬⅠは山砂による盛土、ＬⅡは山砂盛土以前の耕作土である。

　１Ｔでは溝跡の南辺を確認したが、遺物等は出土しなかったことから時期は不明である。２Ｔでは遺構は確認できなかった。

８．調査所見：今回の試掘調査では、溝跡の可能性がある掘り込みを確認したことから、工事施工が基盤層に達する計画の場合には、保存協議を要する。

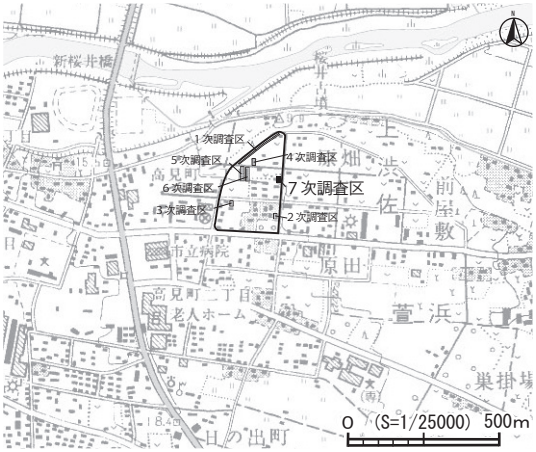


図 25　高見町Ｂ遺跡位置図

図 26　調査区位置図

写真 41　１Ｔ調査状況

写真 42　２Ｔ調査状況

第９項　東町遺跡（５次調査）

１．調査原因：個人住宅の建築
２．所 在 地：南相馬市原町区東町二丁目
３．調査期間：令和３年８月２６日
４．対象面積：148 ㎡
５．調査面積：　12 ㎡
６．調査担当：埋蔵文化財調査員　濱須 脩
７．調査成果：調査対象範囲内に、長さ６ｍ×幅２ｍの調査区を設定して、埋蔵文化財の確認作業を行った。試掘調査では、現地表面から約 60cm の深さで黄色ソフトロームの基盤層に達した。

　基盤層確認までの堆積土は、ＬⅠは砕石、ＬⅡは盛土、ＬⅢは堆積土であり、基盤層に達するまでの過程では、遺構・遺物等は確認できなかった。

８．調査所見：今回の試掘調査では、保存協議を要する埋蔵文化財は確認されなかったことから、改めた保存協議の必要はないが、工事施工にあたっては慎重工事により対応することが望ましい。

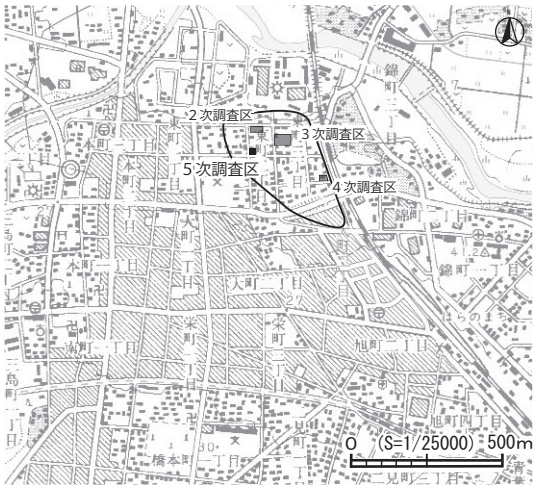


図 27　東町遺跡位置図

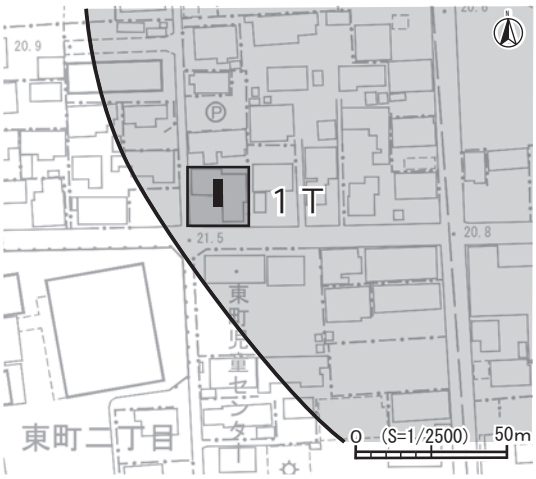


図 28　調査区位置図

写真 43　調査状況

写真 44　土層断面

第 10 項　八幡林遺跡（20 次調査）

1．調査原因：集合住宅の建築

2．所 在 地：南相馬市鹿島区寺内字八幡林

3．調査期間：令和３年９月２７日～１１月２８日

4．対象面積：2,863 ㎡

5．調査面積：　262 ㎡

6．調査担当：埋蔵文化財調査員　濱須 脩

7．調査成果：調査対象範囲内に、16 ヶ所の調査区を設定して確認作業を行い、遺構の検出状況にあわせて、随時拡張を行った。試掘調査では、現地表面から約 30cm の深さで黄色ソフトロームの基盤層に達し、円墳５基を確認した。

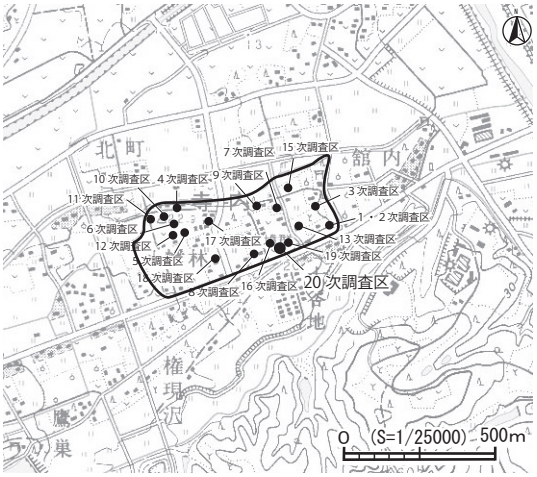


図 29　八幡林遺跡位置図

図 30　調査区位置図

１　号　墳：１・２Ｔで確認した円墳である。確認した範囲は周溝の北側部分であり、周溝上端の最大幅は約４ｍを計測する。想定される墳丘は直径約 20 ｍである。

２　号　墳：７・15 Ｔで確認した円墳である。確認した範囲は周溝の西側部分であり、周溝上端の最大幅は約４ｍを計測する。想定される墳丘は直径約 10 ｍである。

３　号　墳：３・４・５Ｔで確認した円墳である。確認した範囲は周溝の東側部分であり、周溝上端の最大幅は約５ｍを計測する。想定される墳丘は直径約 13 ｍである。

４　号　墳：９Ｔで確認した円墳である。確認した範囲は周溝の南側部分であり、周溝上端の最大幅は約 1.5 ｍを計測する。想定される墳丘は直径約５ｍである。

５　号　墳：11・12 Ｔで確認した円墳である。確認した範囲は 11 Ｔで周溝東側部分、16 Ｔで周溝東側部分である。調査区では周溝の外周を確認することはできなかったことから、周溝の幅は不明である。想定される墳丘は直径約 10 ｍである。

出土遺物：試掘調査では、縄文土器・土師器（甕・高坏）・須恵器（甕）等が出土したが、いずれも表土やカクランから出土しており、古墳にともなうと考えられるものはない。出土した土師器には、古墳時代前期に位置づけられるものが多く、須恵器は９世紀頃のものである。

8．調査所見：今回の試掘調査では、５基の円墳が確認された。想定される墳丘規模は最も小

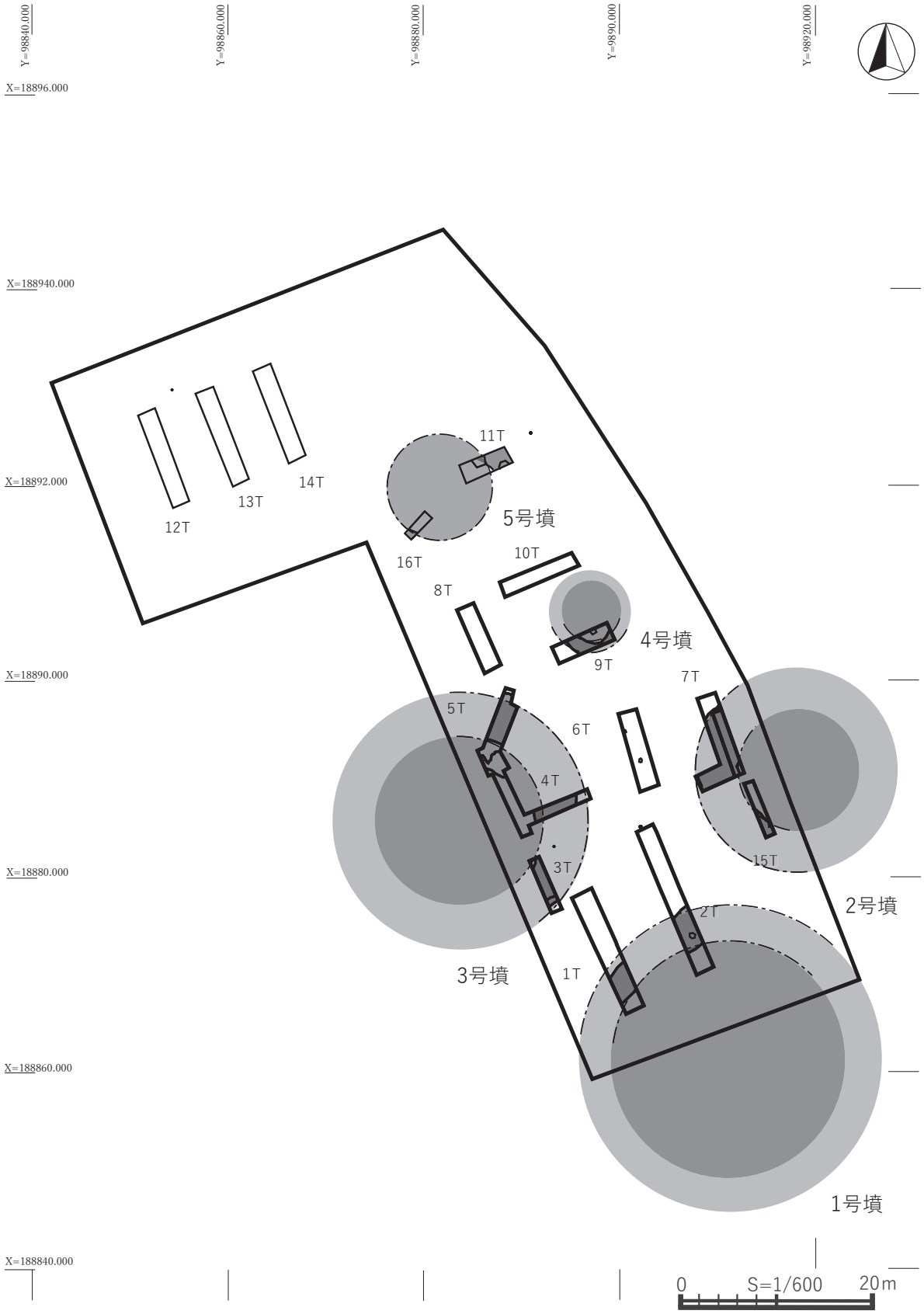

Y=98840.000
Y=98860.000
Y=98880.000
Y=9890.000
Y=98920.000
X=18896.000
X=188940.000
X=18892.000
X=18890.000
X=18880.000
X=188860.000
X=188840.000
12T
13T
14T
11T
5号墳
16T
10T
8T
4号墳
9T
7T
5T
6T
4T
3T
15T
2号墳
2T
3号墳
1T
1号墳
0
S=1/600
20m

図 31　古墳分布図

規模な 4 号墳が 5 m、最も大規模な 1 号墳が 20 mを計測し、墳丘規模に大小が認められた。また、調査区内に密集する状態で分布していることが確認された。

出土遺物には縄文土器、古墳時代前期頃の土師器、９世紀頃の須恵器があり、周囲には縄文時代・古墳時代前期・９世紀頃の遺構が分布している可能性が高い。

このような調査所見から、当該地において遺構確認面まで工事施工が達する場合には、記録保存のための発掘調査を要するとともに、国史跡真野古墳群を構成する古墳であることから、史跡の追加指定等の恒久的な保護措置を検討する必要がある。

写真 45　1Ｔ（１号墳）調査状況

写真 46　2Ｔ（１号墳）調査状況

写真 47　3Ｔ（３号墳）調査状況

写真 48　5Ｔ（３号墳）調査状況

写真 49　7 T（2 号墳）調査状況

写真 50　15T（2 号墳）調査状況

写真 51　9 T（4 号墳）調査状況

写真 52　11T（5 号墳）調査状況

写真 53　16T（5 号墳）調査状況

写真 54　作業風景

第 11 項　荒神前遺跡（10 次調査）

1．調査原因：個人住宅の建築
2．所 在 地：南相馬市小高区片草字荒神前
3．調査期間：令和３年１１月１５日
4．対象面積：667 ㎡
5．調査面積：　26 ㎡
6．調査担当：埋蔵文化財調査員　濱須脩
7．調査成果：調査対象範囲内に、長さ２ｍ×幅１ｍの調査区と、長さ 12 ｍ×幅２ｍの調査区を配置して、埋蔵文化財の確認を行った。

　調査区の基本土層は、ＬＩは砕石を含む表土であり、ＬⅡは表土の下層にある黄色ソフトローム層である。基盤層を確認する過程では、遺構・遺物等の埋蔵文化財は確認されなかった。

8．調査所見：今回の試掘調査では、保存協議を要する埋蔵文化財は確認されなかったことから、改めた保存協議の必要はないが、工事施工にあたっては慎重工事により対応することが望ましい。

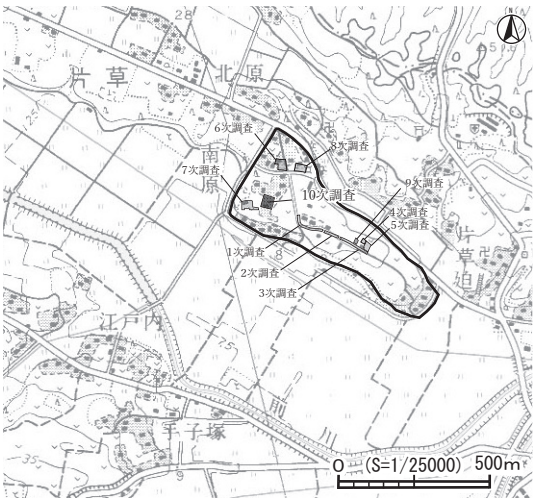


図 32　荒神前遺跡位置図

図 33　調査区位置図

写真 55　１Ｔ調査状況

写真 56　土層断面

第 12 項　北原貝塚（6 次調査）

1．調査原因：県道広野・小高線建設
2．調査地点：南相馬市小高区浦尻字滝ヶ廻地内
3．調査期間：
　　令和 3 年 11 月 8 日～令和 5 年 1 月 14 日
4．対象面積：1,657.53 ㎡
5．調査面積：　　36.7 ㎡
6．調査担当：
　課長補佐兼埋蔵文化財担当係長　川田 強
　埋蔵文化財調査員　濱須 脩

図 34　北原貝塚位置図

7．調査成果：調査は福島県教育委員会令和 3 年度調査における遺物包含層検出地点の再調査と未試掘調査地区を対象に行った。調査区の付番は福島県教育委員会令和 3 年度調査に続けて行った。なお、17・18T は令和 2 年度調査区を拡張した調査区であり、20 ～ 25T が本調査で新たに実施した調査区である。

17・18・21T で縄文時代の遺物包含層を確認した。本調査地区の北側にあたる 22T では表土下約 50 ㎝、南側にあたる 23・24T では、表土下 30 ～ 50 ㎝で遺構確認面である黄褐色砂質シルト層を確認した。22 ～ 24T では縄文～平安時代に堆積した遺物包含層や遺構は検出されなかった。これらの調査により、当該遺物包含層の範囲は南北約 70m にわたることが把握された。また、本調査地区の斜面下にあたる現市道の西側にあたる 25T では、少量の土師器、縄文土器が出土した。しかし、これらは表土下の 2 層（図 38）からの散漫な出土が主体であり、流れ込みと考えられ、平安時代以前の遺構・堆積層は存在しないと判断できる。このことから、1 次調査等で確認された貝層・遺物包含層は現道より東側で収束するものと想定される。

確認された遺物包含層は、22T では上面での検出にとどめ、17・18T では、掘削して遺物包含層の厚さ、堆積状況を確認する調査を実施した。

17T 1 ～ 4 層は淘汰が悪く、斜面上位からの崩落土と考えられる。調査区西側に堆積する 5 ～ 7 層は黒色を基調とした砂質シルト～シルト～シルト質砂であり、湧水も認められる。斜面に平行した堆積であり、谷部に堆積した湿地性の自然堆積土と考えられる。主体となる土器は縄文時代前期中葉の大木 2 a、2 b 式である。上位の 5 層等では少量の土師器や縄文時代後期の土器が含まれている。下位の 6 ・ 7 層では縄文時代前期中葉の土器に限られており、縄文時代前期が主な堆積時期と考えられる。

17T の西側斜面下位には、黄褐色シルトを含む 8 ・ 9 層が堆積する。上位の 5 ～ 7 層、下位の 10 層は黒色基調砂質シルトであり、層境が明確である。8・ 9 層は淘汰が悪く偽礫を多く含むこと、ラミナ状の堆積を示さないことから人為的な堆積土と判断した。上下層に湧水の影響が認められる堆積物であることから、湧水箇所における整地層と想定される。

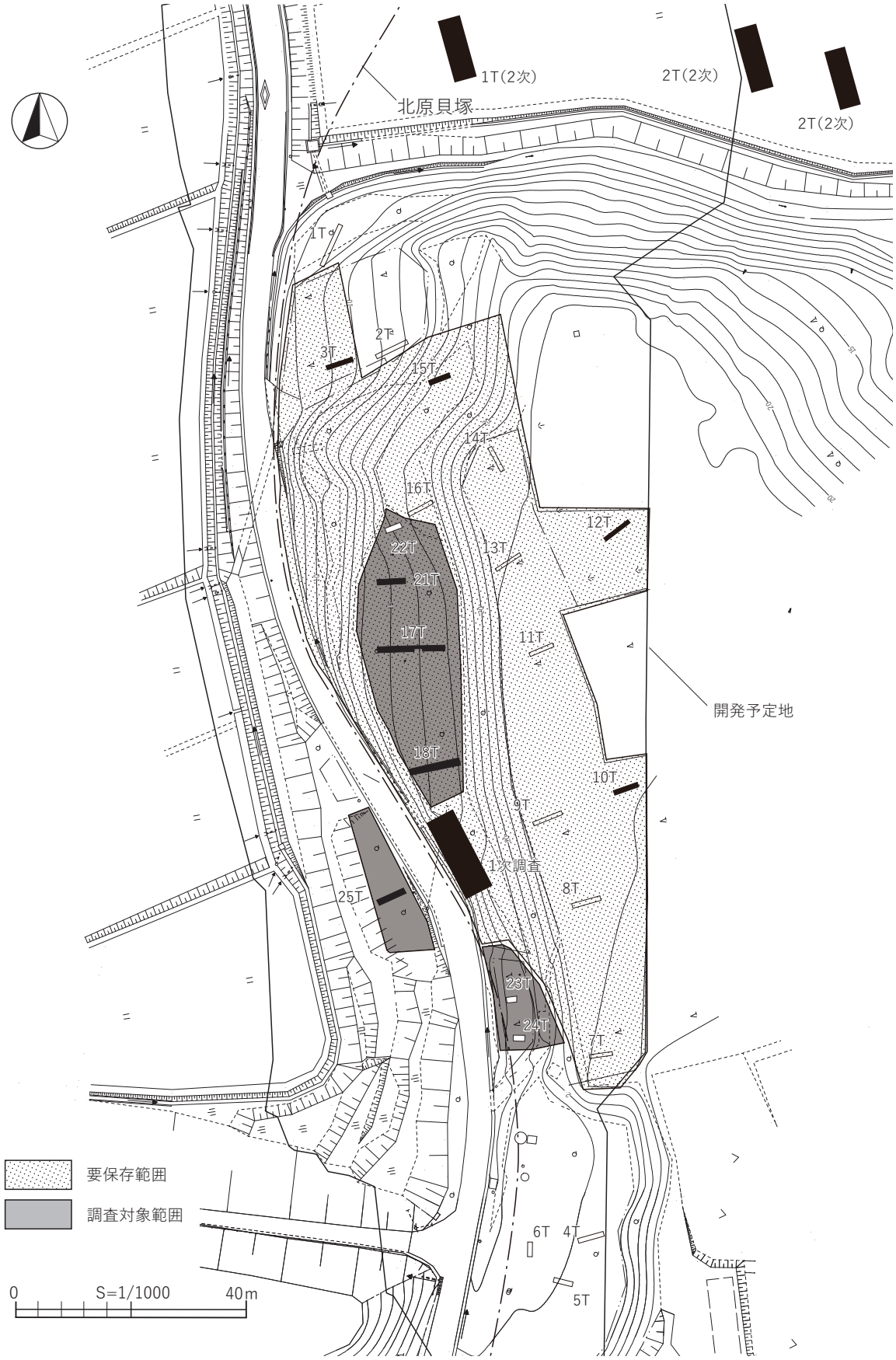


図 35　北原貝塚調査場所図面

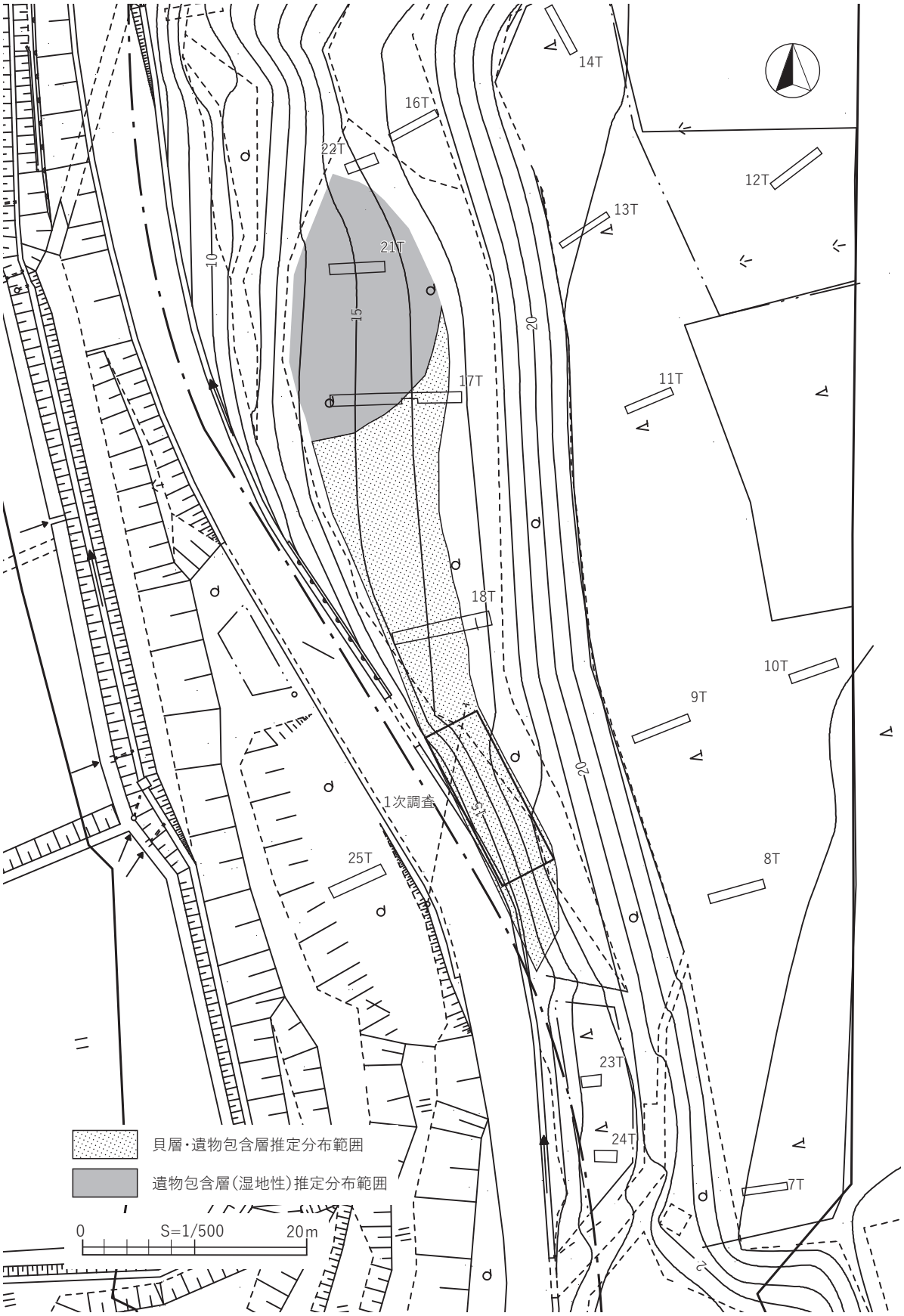


図 36　北原貝塚調査場所図面

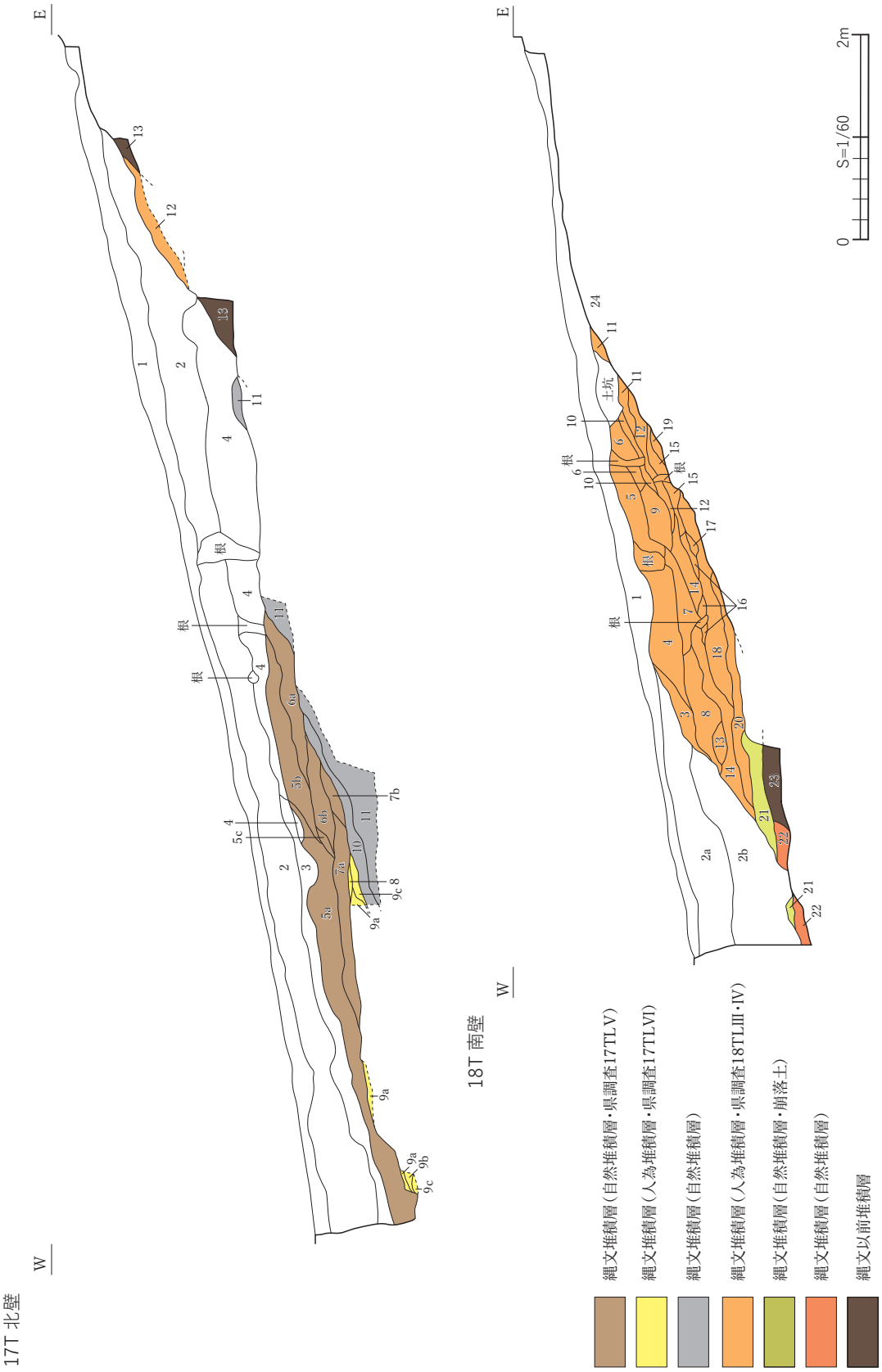
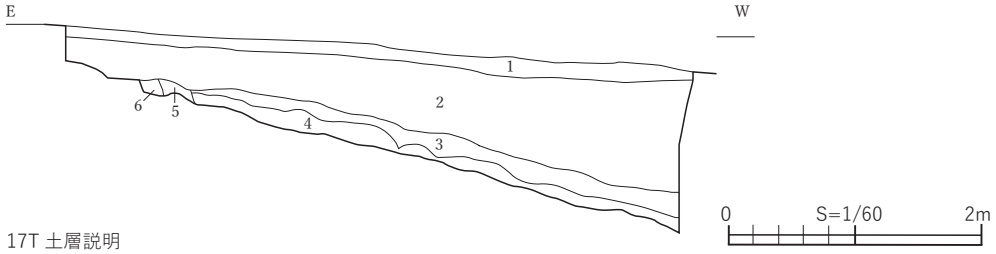


図 37　北原貝塚調査断面図（1）

25T 南壁



17T 土層説明

1（L Ⅰ）	黒褐色砂質シルト 10YR2/3	淘汰悪		炭化物 1 ～ 2mm			
2（L Ⅱ）	暗褐色砂質シルト 10YR3/3	淘汰悪		炭化物 1 ～ 2mm			
3（L Ⅲ）	黒褐色砂質シルト 10YR2/2	淘汰悪	土器あり	炭化物 1 ～ 3mm			
4	黄褐色シルト質砂 10YR5/6	淘汰悪		炭化物 1 ～ 3mm			
5a（L Ⅴ）	黒色砂質シルト 10YR2/1	淘汰やや悪	土器あり	炭化物 1 ～ 10ｍｍ	焼土粒 2 ～ 5mm	偽礫 3 ～ 5mm	多角
5b（L Ⅴ）	黒色シルト 10YR1.7/1	淘汰やや悪	土器あり	炭化物 1 ～ 5mm	焼土粒 1 ～ 3mm		
5c（L Ⅴ）	黒色砂質シルト 10YR1.7/1	淘汰悪		炭化物 1 ～ 3mm	焼土粒 1 ～ 3mm		
6a（L Ⅴ）	暗褐色シルト質砂 10YR3/4	淘汰悪	土器あり	炭化物 1 ～ 2mm	焼土粒 2 ～ 5mm		
6b（L Ⅴ）	黒褐色シルト質砂 10YR3/2	淘汰悪	土器あり	炭化物 2 ～ 15mm	焼土粒 1 ～ 2mm		
7a	黒褐色砂質シルト 10YR2/2	淘汰やや悪	土器あり	炭化物 1 ～ 3mm	焼土粒 2 ～ 4mm	偽礫 2 ～ 10mm	多角
7b	暗褐色砂質シルト 10YR3/3	淘汰やや悪	土器あり	炭化物 1 ～ 6mm	焼土粒 1 ～ 5mm		
8	黒褐色シルト 10YR2/2	悪		炭化物 1 ～ 8mm	焼土粒 1 ～ 5mm	偽礫 1 ～ 8mm	多角
9a	にぶい黄褐色シルト 10YR5/3	淘汰やや悪	土器あり	炭化物 1 ～ 22mm	焼土粒 1 ～ 10mm	偽礫 1 ～ 16mm	多角
9b	暗褐色シルト 10YR3/3	淘汰悪	土器あり	炭化物 1 ～ 23mm	焼土粒 1 ～ 8mm	偽礫 2 ～ 8mm	多角
9c	灰黄褐色シルト 10YR4/2	淘汰悪	土器あり	炭化物 1 ～ 4mm	焼土粒 1 ～ 2mm	偽礫 2 ～ 4mm	多角
10	黒褐色砂質シルト 10YR3/2	淘汰悪	土器あり	炭化物 2 ～ 16mm	焼土粒 1 ～ 2mm		
11（LVI）	灰黄褐色砂質シルト 10YR4/2	淘汰悪	土器あり	炭化物 1 ～ 2mm			
12	暗褐色シルト 10YR3/4	淘汰悪	土器あり	炭化物 1 ～ 20mm	焼土粒 1 ～ 3mm	偽礫 3 ～ 20mm	多角
13	褐色シルト 10YR4/6	淘汰良					

18T 土層説明

1（L Ⅰ）	暗褐色砂質シルト 10YR　3/3	淘汰悪		炭化物 1 ～ 2mm			
2a（L Ⅱa）	暗褐色砂質シルト 10YR　3/4	淘汰悪		炭化物 1 ～ 2mm			
2b（L Ⅱb）	黒褐色砂質シルト 10YR　2/3	淘汰悪		炭化物 1 ～ 2mm			
3（L Ⅲ）	黒褐色シルト 10YR　2/2	淘汰やや悪	土器あり	炭化物 1 ～ 3mm	焼土粒 1 ～ 4mm	偽礫 1 ～ 4mm	多角
4（L Ⅲ）	黒褐色シルト 10YR　2/3	淘汰やや悪	土器あり	炭化物 1 ～ 7mm	焼土粒 1 ～ 13mm	偽礫 1 ～ 5mm	丸
5（LIV）	暗褐色シルト 10YR　3/3	淘汰悪	土器あり	炭化物 1 ～ 8mm	焼土粒 1 ～ 5mm	偽礫 1 ～ 6mm	丸
6（LIV）	黒褐色シルト 10YR　2/3	淘汰悪	土器あり	炭化物 1 ～ 4mm	焼土粒 1 ～ 4mm	偽礫 1 ～ 5mm	多角
7（LIV）	黒褐色シルト 10YR　2/2	淘汰悪	土器あり	炭化物 3 ～ 20mm	焼土粒 1 ～ 2mm	偽礫 1 ～ 10mm	多角
8（LIV）	暗褐色シルト 10YR　3/3	淘汰やや悪	土器あり	炭化物 1 ～ 6mm	焼土粒 1 ～ 2mm	偽礫 1 ～ 3mm	多角
9（LIV）	黒褐色シルト 10YR　2/3	淘汰やや悪	土器あり	炭化物 2 ～ 10mm	焼土粒 1 ～ 20mm	偽礫 1 ～ 2mm	多角
10（LIV）	暗褐色シルト 10YR　3/3	淘汰悪		炭化物 1 ～ 10mm	焼土粒 1 ～ 2mm	偽礫 1 ～ 8mm	丸
11（LIV）	黒褐色シルト 10YR　2/2	淘汰悪		炭化物 1 ～ 5mm	焼土粒 1 ～ 3mm	偽礫 1 ～ 3mm	多角
12（LIV）	暗褐色シルト 10YR　3/4	淘汰悪	土器あり	炭化物 3 ～ 10mm	焼土粒 2 ～ 4mm	偽礫 2 ～ 5mm	多角
12（LIV）	暗褐色シルト 10YR　3/3	淘汰悪		炭化物 3 ～ 20mm	焼土粒 1 ～ 2mm	偽礫 2 ～ 10mm	多角
14（LIV）	黒褐色シルト 10YR　2/3	淘汰やや悪	土器あり	炭化物 2 ～ 10mm	焼土粒 1 ～ 2mm	偽礫 2 ～ 30mm	多角
15（LIV）	暗褐色シルト 10YR　3/3	淘汰悪	土器あり	炭化物 2 ～ 13mm	焼土粒 1 ～ 5mm	偽礫 1 ～ 3mm	丸
16（LIV）	褐色シルト 10YR　4/6	淘汰やや悪		炭化物 1 ～ 10mm			
17（LIV）	黒褐色シルト 10YR　2/3	淘汰悪		炭化物 1 ～ 20mm	焼土粒 1 ～ 2mm	偽礫 1 ～ 5mm	丸
18（LIV）	暗褐色シルト 10YR　3/4	淘汰やや悪	土器あり	炭化物 2 ～ 12mm	焼土粒 1 ～ 2mm	偽礫 1 ～ 10mm	多角
19（LIV）	褐色シルト 10YR　4/4	淘汰やや悪		炭化物 1 ～ 10mm	焼土粒 1 ～ 3mm	偽礫 1 ～ 5mm	丸
20（LIV）	黒褐色シルト 10YR　2/3	淘汰悪	土器あり	炭化物 1 ～ 40mm	焼土粒 1 ～ 4mm	偽礫 1 ～ 3mm	多角
21	褐色砂質シルト 10YR　4/6	淘汰悪		炭化物 1 ～ 2mm		偽礫 1 ～ 10mm	多角
22	暗褐色シルト 10YR　2/4	淘汰やや悪	土器あり	炭化物 1 ～ 5mm		偽礫 1 ～ 5mm	丸
23	褐色砂質シルト 10YR　4/6	淘汰良					

25T 土層説明

1	表土		
2	暗褐色砂質シルト	10YR3/4	盛土層。
3	黒褐色砂質シルト	10YR2/3	砂多量。褐色土ブロック・炭化物少量。焼土微量。土器出土。
4	暗褐色砂質シルト	10YR3/3	
5	黒褐色砂質シルト	10YR2/3	褐色土ブロック少。炭化物・焼土粒少量。
6	褐色シルト・シルト質砂	10YR4/6	

（　）層名は令和３年度福島県教育委員会調査の記載層位に対応する。

図 38　北原貝塚調査断面図（2）

10・11 層は斜面に平行する黒色基調の堆積土である。湧水が認められる。縄文時代前期中葉の遺物が出土することから、前期中葉以降の谷部の堆積土と考えられる。

17T12 層、18T ３～ 20 層は黄褐色偽礫や炭化粒、焼土粒を多く含み、多量の縄文土器が出土する。褐色基調と黒色基調の堆積土を挟むなど複雑な堆積を示すこと、遺構確認面とした黄褐色砂質シルトに起因する偽礫を多く含むことから、人為的な埋め土が主体と考えられる。18T では厚い堆積を示し、最大厚 85 ㎝を測る。土器の出土量も多く、図 42 － 1 など大形破片も含まれている。類似した人為的堆積土は隣接する浦尻貝塚（南相馬市教育委員会 2005・2008)、片草貝塚（南相馬市教育委員会 2019）で確認されており、貝塚に伴うまたは貝塚との一連の土廃棄層と評価されている。当該地点においても隣接する１次調査でイボキサゴを主体とする貝塚が確認されており、浦尻貝塚等と同様の状況と位置付けられる。

18T では人為的な埋土と考えられる 20 層下に褐色砂質シルトの淘汰の悪い 21 層が堆積している。土器や焼土粒の出土量が少なく、基盤の黄褐色砂質シルトの崩落土と考えられる。その下位の少量の縄文土器を含む暗褐色砂質シルトの 22 層は斜面に平行する堆積であることから、自然堆積層と考えられる。縄文時代前期の段階で地すべりが発生し、その後、土廃棄が行われた過程が想定される。

出土遺物を図 39 ～ 43 に示した。21・24・25T ではロクロ成形の９世紀代の土師器が出土している（図 43―13 ～ 15)。平安時代の遺構等は確認されていない。主体となるのは 17・18・22T の遺物包含層から出土した縄文土器である。少量の縄文時代後期（図 39 － 1 ・ 2)、中期（同図－ 3)、早期（図 42 － 3 ）の土器が出土しているものの、最も多いのは縄文時代前期中葉にあたる大木２a 式(図 39 － 13､図 42 － 1 等) である。上位層からは大木２b 式(図 41 － 1 、 7 等)、浮島・諸磯式（同図－ 4 ・ 5 ）がある。福島県教育委員会令和３年度調査において、18T の遺物包含層上位層である６層を掘り込む土坑からは大木２b 式が多く出土しており（福島県教育委員会 2023)、土廃棄による当該遺物包含層は大木２a 式期が主な形成時期と考えられる。

１次調査では、これに先立つループ文を多く残す縄文時代前期前葉にあたる広義の宮田Ⅲ群土器（竹島 1975）が主体となって出土している。このことから、１次調査で確認した貝層は、本調査地点の遺物包含層に先行すると位置付けられる。

この他、３点の石器が出土している。図 43 － 10・11 は縄文時代の所産、同図 12 は端部に穿孔があり、石庖丁が転用された磨石と考えられる。12 は側面も研磨されている。

８．調査所見：今回の試掘調査では、縄文時代前期中葉を中心とする遺物包含層が確認された。この包含層は１次調査を含めた遺跡西部にあたる貝層を含めた一連の縄文時代前期の包含層と考えられる。これまでの調査を概観すると、斜面上位にあたる１次調査地点で前期前葉にイボキサゴを主体とする貝層が形成された後、前期中葉に 18T 付近を中心に人為的な土廃棄が行われる。より斜面下位の 17T 西側、22T 周辺では土の廃棄、貝塚の形成が及ばず、湧水のある湿地性の遺物包含層が形成される。また、この湧水地点では当該期の整地層が確認された。

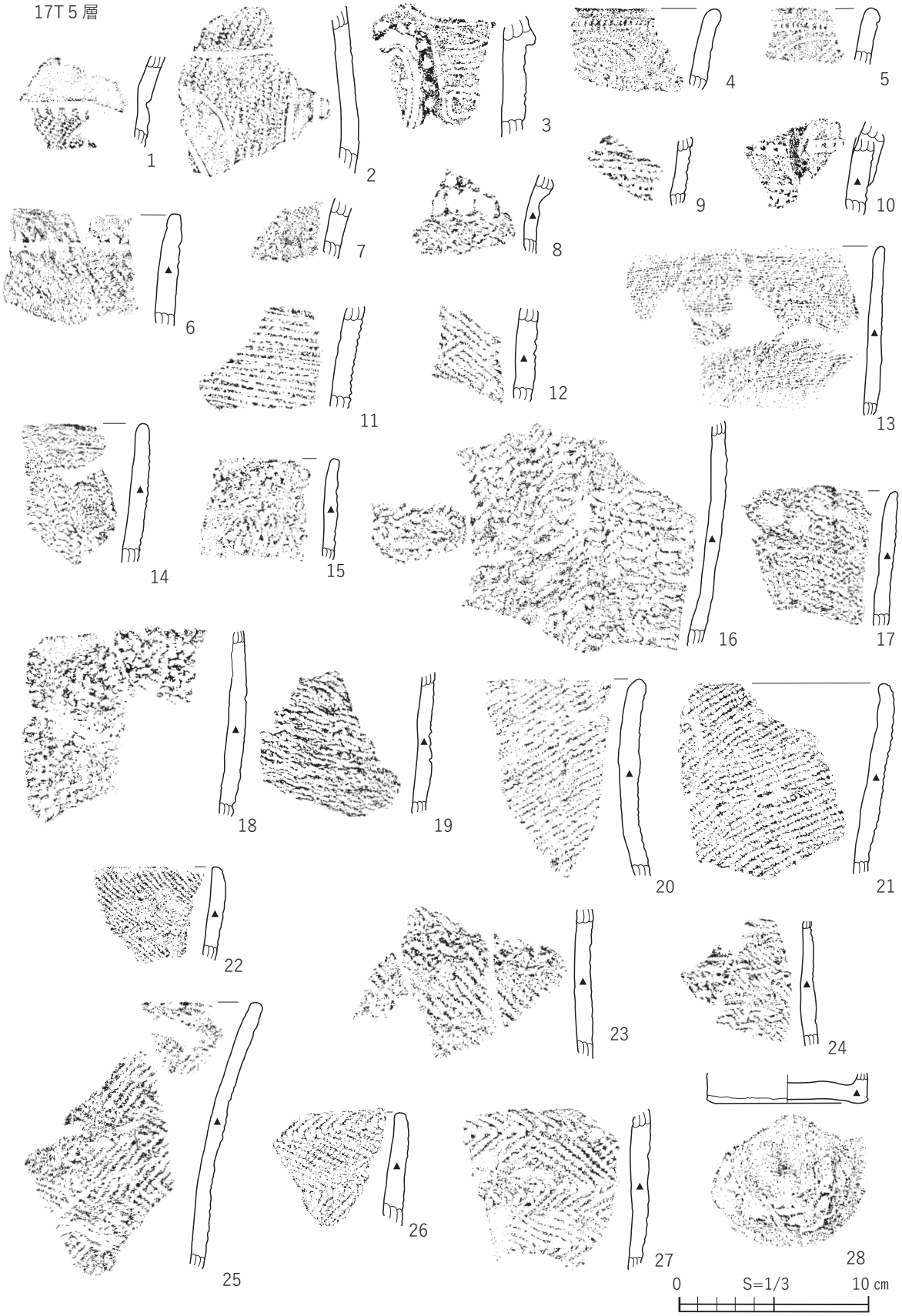


図 39　北原貝塚出土遺物（1）

このように検出された遺物包含層は貝塚と一連の形成と考えられ、保存状況も良好である。また、湧水地点の整地はいわゆる水場遺構の存在も想定され、本遺跡の縄文遺跡としての重要性は高いと評価できる。

出土土器は縄文時代早期、中期、後期も少量あり、縄文時代を通じて遺構等が存在する可能性がある。また、9 世紀代の土師器も出土しており、北原貝塚は平安時代の遺跡であるということも新たに確認された。

開発区域では未調査地区もあり、今後の保存協議は追加調査をもって判断されることとなる。しかし、本遺跡は国史跡浦尻貝塚に先行する貝塚を伴う遺跡であることは確実であり、貝塚を伴う通時的な遺跡群を構成する将来にわたり保存すべき重要遺跡とも評価できるため、本遺跡における開発計画に際しては、遺跡の重要性を考慮した保存協議が必要である。

図 40　北原貝塚出土遺物（2）

図 41　北原貝塚出土遺物（3）

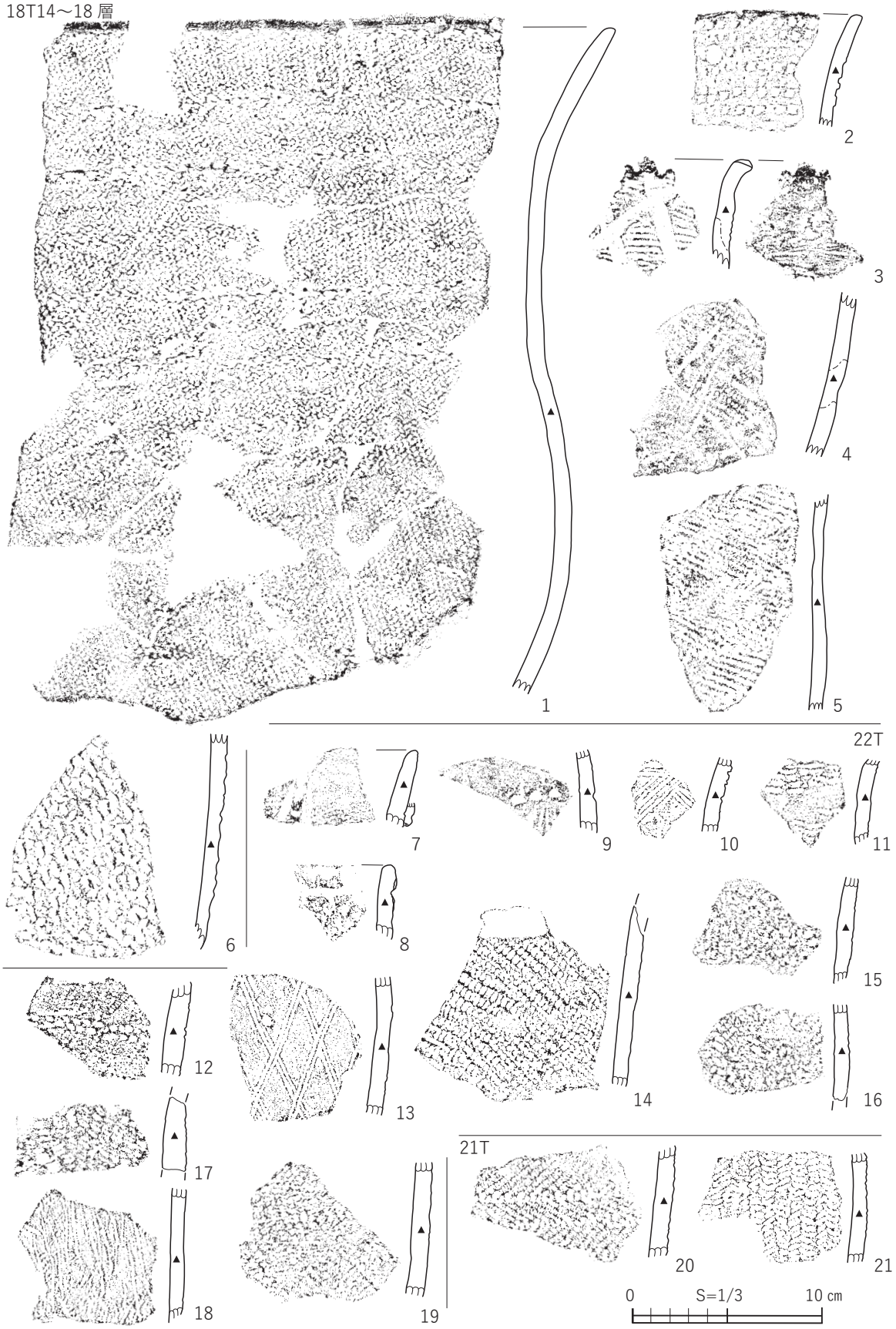


図 42　北原貝塚出土遺物（4）

参考文献

小高町教育委員会（2001）小高町内埋蔵文化財調査報告 , 小高町文化財調査報告書第 2 集

小高町教育委員会（2004）北原貝塚遺跡群 , 小高町文化財調査報告書第 5 集

小高町教育委員会（2005）浦尻貝塚 1 , 小高町文化財調査報告書第 6 集

福島県教育委員会（2023）東日本大震災復興関連遺跡調査報告 9 ,福島県文化財調査報告書第 561 集

南相馬市教育委員会（2008）浦尻貝塚 3 , 南相馬市埋蔵文化財調査報告第 11 集

南相馬市教育委員会（2019）南相馬市内遺跡発掘調査報告書 12 －平成 29 年度試掘調査報告－ , 南相馬市埋蔵文化財調査報告第 28 集

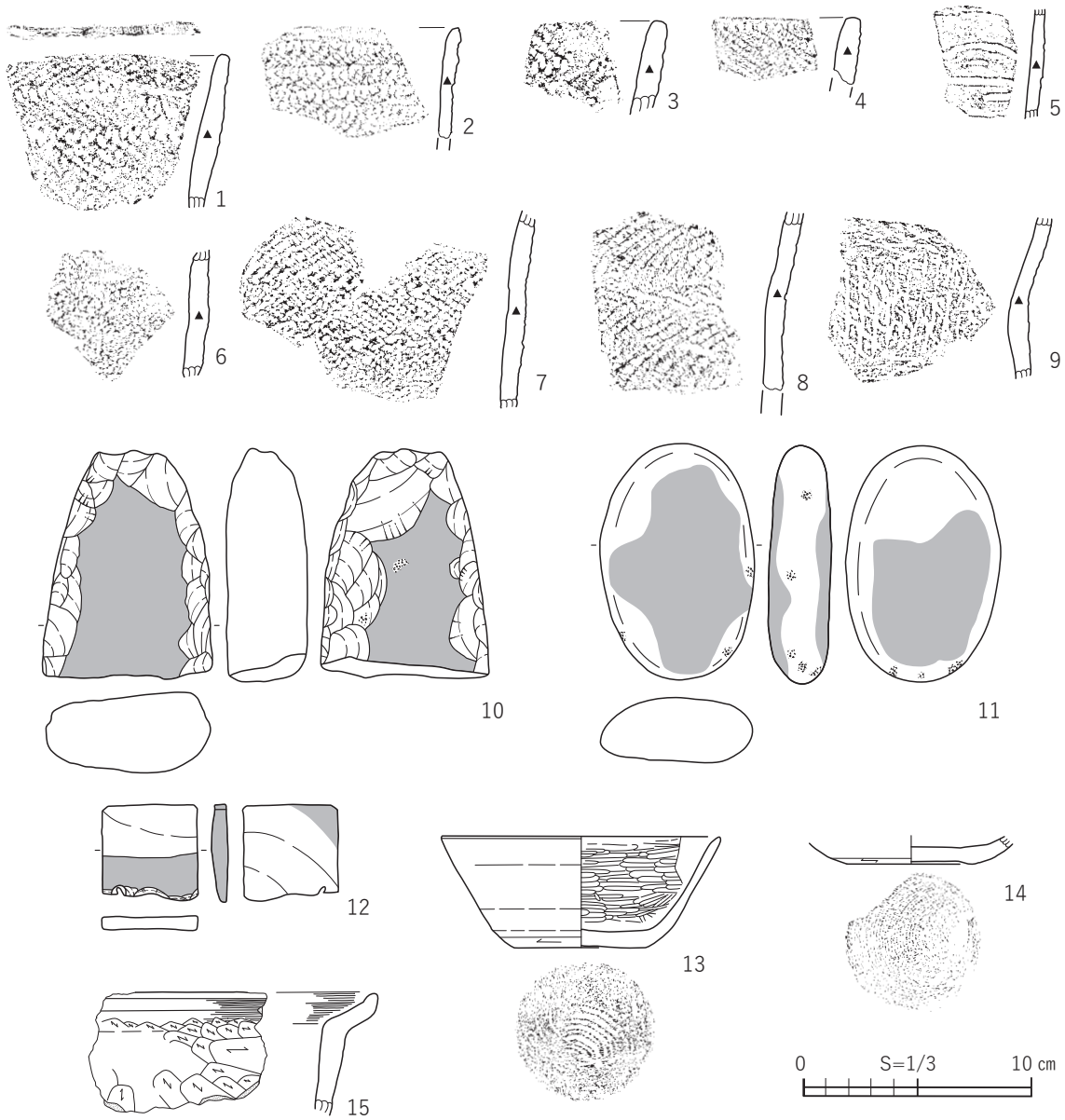


図 43　北原貝塚出土遺物（5）

写真 57　17T 全景（西から）

写真 58　17T 北側壁面堆積状況 (西から).

写真 59　17T 北側壁面堆積状況（東から）

写真 60　21 T 全景 (東から)

写真 61　18T 全景（東から）

写真 62　18T 全景（西から）

写真 63　18T 南側壁面堆積状況（1）

写真 64　18T 南側壁面堆積状況（2）

写真 65　18T 遺物出土状況（1）

写真 66　18T 遺物出土状況（2）

写真 67　22T 全景（西から）

写真 68　23 T（西から）

写真 69　25T 全景（東から）

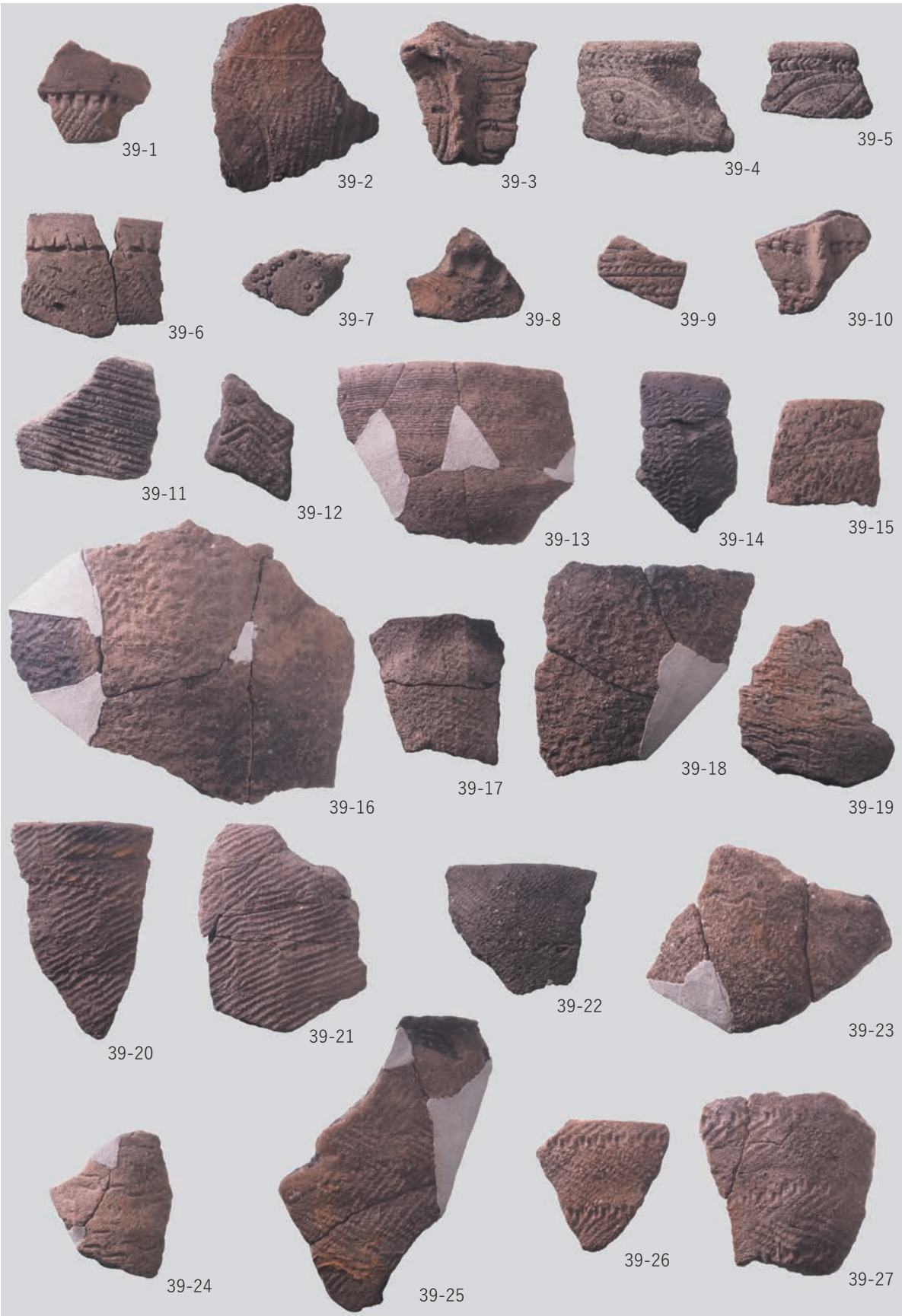

39-1
39-2
39-3
39-4
39-5
39-6
39-7
39-8
39-9
39-10
39-11
39-12
39-13
39-14
39-15
39-16
39-17
39-18
39-19
39-20
39-21
39-22
39-23
39-24
39-25
39-26
39-27

写真 70　出土遺物（1）

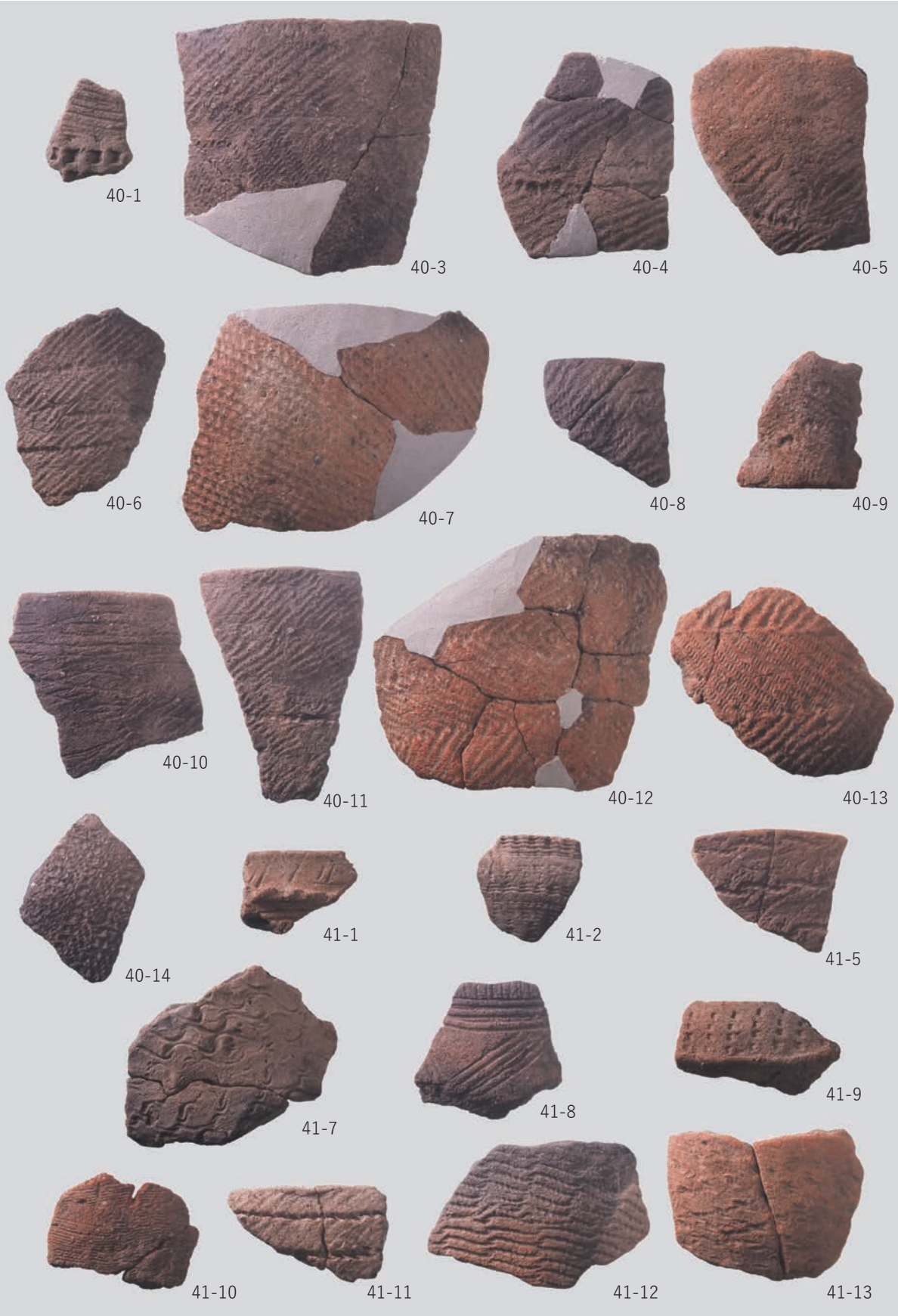

40-1
40-3
40-4
40-5
40-6
40-7
40-8
40-9
40-10
40-11
40-12
40-13
40-14
41-1
41-2
41-5
41-7
41-8
41-9
41-10
41-11
41-12
41-13

写真 71　出土遺物（2）

41-14
41-15
41-17
41-19
41-20
41-27
42-1
42-2
42-3
42-5
42-6
42-7
42-12
42-13
43-10
43-11
43-12
43-13
43-15

写真 72　出土遺物（3）

挿図番号	図内番号	調査区	出土位置	器種	口径（cm）	底径（cm）	器高（cm）	残存率（%）	外面	内面	底部	備考
39	1	17T	5 層	縄文土器					横位 LR 縄文、沈線、棒状工具刺突	ミガキ		
39	2	17T	5 層	縄文土器					横位・斜位 LR 縄文、未調整沈線文、磨消	ミガキ		
39	3	17T	5 層	縄文土器					刺突付隆帯、押引沈線文	ナデ		
39	4	17T	5 層	縄文土器					木葉文・爪形文、平行沈線文、円形竹管文	ミガキ		
39	5	17T	5 層	縄文土器					木葉文・爪形文、平行沈線文	ミガキ		
39	6	17T	5 層	縄文土器					棒状工具刺突→ヘラ状工具刺突・縦位 LR 縄文	ナデ		繊維
39	7	17T	5 層	縄文土器					円形竹管文	ナデ		
39	8	17T	5 層	縄文土器					押捺、横位直前段合撚	ナデ		繊維
39	9	17T	5 層	縄文土器					爪形文	ナデ		
39	10	17T	5 層	縄文土器					刺突付隆帯、爪形文	ナデ		繊維
39	11	17T	5 層	縄文土器					半截竹管による横位沈線文	ナデ		
39	12	17T	5 層	縄文土器					山形平行沈線文、横位 RL 縄文	ミガキ		繊維
39	13	17T	5 層	縄文土器					押引平行沈線文、櫛描沈線文（小波状文、コンパス文）	ナデ		繊維
39	14	17T	5 層	縄文土器					横位側面ループ文	ケズリ		繊維
39	15	17T	5 層	縄文土器					直前段合撚？	ナデ		繊維
39	16	17T	5 層	縄文土器					横位側面ループ文	ミガキ		繊維
39	17	17T	5 層	縄文土器					横位直前段合撚	押捺・ナデ		繊維
39	18	17T	5 層	縄文土器					横位側面ループ文	ナデ		繊維
39	19	17T	5 層	縄文土器					横位直前段合撚	ミガキ		繊維
39	20	17T	5 層	縄文土器					横位 LR 縄文	ナデ		繊維
39	21	17T	5 層	縄文土器					横位 LR 縄文	ミガキ		繊維
39	22	17T	5 層	縄文土器					横位 RL 縄文	ミガキ		繊維
39	23	17T	5 層	縄文土器					横位 RL 縄文、結束縄文	ナデ		繊維
39	24	17T	5 層	縄文土器					横位 RL 縄文、結束縄文	ミガキ		繊維
39	25	17T	5 層	縄文土器					横位非結束羽状縄文（0 段多条？）	ナデ		繊維
39	26	17T	5 層	縄文土器					横位結束 LR・RL 羽状縄文	ミガキ		繊維
39	27	17T	5 層	縄文土器					横位結束 LR・RL 羽状縄文	ミガキ		繊維
39	28	17T	5 層	縄文土器		8.4			縄文？	ナデ	ナデ	繊維
40	1	17T	6 層	縄文土器					爪形文、横位平行沈線文	ミガキ		繊維
40	2	17T	6 層	縄文土器					爪形文	ミガキ		繊維
40	3	17T	6 層	縄文土器					横位非結束 0 段多条（R）・LR 羽状縄文	ミガキ		繊維
40	4	17T	6 層	縄文土器					横位ループ付 LR ？縄文	ナデ		繊維
40	5	17T	6 層	縄文土器					横位ループ付 LR 縄文	ナデ		繊維
40	6	17T	6 層	縄文土器					横位ループ付 LR 縄文	ナデ		繊維
40	7	17T	6 層	縄文土器					横位 RLR 縄文	ミガキ		繊維
40	8	17T	7b 層	縄文土器					横位 LR 縄文	ミガキ		繊維
40	9	17T	7 層	縄文土器		8.6			横位 RL 縄文	ナデ	ナデ	繊維
40	10	17T	10 層	縄文土器					横位 R 撚糸文	ケズリ・ナデ		繊維
40	11	17T	8 層	縄文土器					横位 LR 縄文、ナデ消	ミガキ		繊維
40	12	17T	9 層	縄文土器					横位結束 0 段多条（R・L）羽状縄文	ミガキ		繊維
40	13	17T	10 層	縄文土器					横位側面ループ文	ミガキ		繊維
40	14	17T	9 層	縄文土器					横位非結束 0 段多条（R・L）羽状縄文	ミガキ		繊維
41	1	18T	1 層	縄文土器					斜位短沈線、押捺付隆帯、平行沈線文	ナデ		繊維
41	2	18T	1 層	縄文土器					半截竹管による多条小波状沈線文、押引沈線文	ナデ		繊維
41	3	18T	1 層	縄文土器					横位 LR? 縄文	ナデ		繊維
41	4	18T	1 層	縄文土器					横位直前段合撚	ナデ		繊維
41	5	18T	1 層	縄文土器					横位直前段合撚、結節縄文	ナデ		繊維
41	6	18T	1 層	縄文土器					横位 LR 縄文？	ナデ		繊維
41	7	18T	1 層	縄文土器					S 字状連鎖沈文	ミガキ		繊維
41	8	18T	4 層	縄文土器					縦位縦短沈線、横位平行沈線、山形平行沈線文	ミガキ		繊維
41	9	18T	6 層	縄文土器					横位刺突列、隆帯	ミガキ		繊維
41	10	18T	6 層	縄文土器					櫛描小波状沈線文	ナデ		繊維
41	11	18T	4 層	縄文土器					横位 LR 縄文、押捺 LR 縄文	ミガキ		繊維
41	12	18T	6 層	縄文土器					葺瓦状撚糸文	ナデ		繊維
41	13	18T	6 層	縄文土器					横位直前段合撚	ナデ		繊維
41	14	18T	3 層下	縄文土器					横位 LR 縄文・口唇 LR 縄文	ミガキ		繊維
41	15	18T	6 層	縄文土器					横位 LL 縄文	ケズリ・ナデ		繊維
41	16	18T	6 層	縄文土器					横位 LR 縄文	ナデ		繊維
41	17	18T	4 層	縄文土器					横位連続刺突列	ミガキ		繊維
41	18	18T	4 層	縄文土器		5.8			横位連続刺突列	ナデ	ナデ	繊維
41	19	18T	9 層	縄文土器					半截竹管による刺突列、押捺付隆帯、沈線、円形竹管文	ナデ		繊維
41	20	18T	9 層	縄文土器					縦位短沈線、爪形文（交互刺突）、半截竹管工具による刺突文	ミガキ		繊維
41	21	18T	9 層	縄文土器					横位 RL 縄文、ナデ消	ナデ		繊維
41	22	18T	9 層	縄文土器					横位 RL 縄文、ナデ消	ナデ		繊維
41	23	18T	9 層	縄文土器					斜位 LR 縄文	ミガキ		繊維
41	24	18T	10・11 層	縄文土器					横位 LR 縄文、結節縄文	ナデ		繊維
41	25	18T	10・11 層	縄文土器					横位 RL 縄文、ナデ消	ナデ		繊維
41	26	18T	9 層	縄文土器					横位結束 LR・RL 羽状縄文、結節縄文	ナデ		繊維
41	27	18T	9 層	縄文土器		9.4			横位 RL 縄文	ナデ	ナデ	繊維
42	1	18T	14 層	縄文土器					横位直前段合撚	ミガキ		繊維
42	2	18T	18 層	縄文土器					半截竹管による横位刺突列	ミガキ		繊維 補修孔
42	3	18T	18 層	縄文土器					口唇棒状工具による刺突条痕、ヘラ状工具による格子状沈線	条痕		繊維

第 12 項　北原貝塚（6 次調査）

挿図番号	図内番号	調査区	出土位置	器種	口径（cm）	底径（cm）	器高（cm）	残存率（%）	外面	内面	底部	備考
42	4	18T	14 層	縄文土器					横位 RL 縄文	ミガキ		繊維
42	5	18T	14 層	縄文土器					ループ付 RL 縄文	ミガキ		繊維
42	6	18T	18 層	縄文土器					横位側面ループ文	ミガキ		繊維
42	7	21T	3 層	縄文土器					縦位押捺付隆帯、横位直前段合撚	ミガキ		繊維
42	8	21T	3 層	縄文土器					縦位刻み、縄文	ミガキ		繊維
42	9	21T	3 層	縄文土器					横位刺突列、多条沈線	ナデ		繊維
42	10	21T	3 層	縄文土器					櫛描山形沈線文	ミガキ		繊維
42	11	21T	3 層	縄文土器					横位押引沈線文	ナデ		繊維
42	12	21T	3 層	縄文土器					横位、斜位刺突列	ナデ		繊維
42	13	21T	3 層	縄文土器					半截竹管による平行沈線、格子状文	ナデ		繊維圧痕あり
42	14	21T	3 層	縄文土器					横位直前段合撚	ミガキ		繊維
42	15	21T	3 層	縄文土器					横位側面ループ文	ナデ		繊維
42	16	21T	3 層	縄文土器					横位側面ループ文	ミガキ		繊維
42	17	21T	3 層	縄文土器					押引刺突列	ミガキ		繊維
42	18	21T	5 層	縄文土器					縦位撚糸文	ミガキ		繊維
42	19	21T	3 層	縄文土器					横位・斜位 RL 縄文	ナデ		繊維
42	20	22T	2 層	縄文土器					非結束羽状縄文（0 段多条 L・R）	ミガキ		繊維
42	21	22T	2 層	縄文土器					側面ループ文	ミガキ		繊維
43	1	25T	一括	縄文土器					横位結束羽状縄文（LR・RL ？）口唇キザミ	ミガキ		繊維
43	2	25T	2 層	縄文土器					横位ループ付 LR 縄文	ミガキ		繊維
43	3	25T	2 層	縄文土器					横位結束羽状縄文（LR・RL ？）	ミガキ		繊維
43	4	25T	2 層	縄文土器					横位 RL 縄文	ミガキ		繊維
43	5	25T	4 層	縄文土器					沈線	ナデ		繊維
43	6	25T	一括	縄文土器					横位直前段合撚	ミガキ		繊維
43	7	25T	2 層	縄文土器					横位結束羽状縄文（LR・RL ？）、結節縄文	ナデ		繊維
43	8	25T	2 層	縄文土器					横位 LR 縄文、結節縄文	ミガキ		繊維
43	9	25T	3 層	縄文土器					縦位網目状撚糸文、結節縄文？	ナデ		繊維
43	13	21T	5 層	土師器坏	12	5.6	4.6	30%	口～体部：ロクロナデ　体部下端：回転ヘラケズリ	ミガキ、黒色処理	回転糸切り、外周回転ヘラケズリ	
43	14	24T	一括	土師器坏		5.6		80%	体部：ロクロナデ　体部下端：回転ヘラケズリ	ミガキ、黒色処理	回転糸切り	
43	15	25T	5 層	土師器甕					口：ロクロナデ　頸～体部：ヘラケズリ	ロクロナデ、ナデ		

図表番号	図内番号	調査区	出土位置	種類	最大長（mm）	最大幅（mm）	最大厚（mm）	重量（g）	石材	備考
43	10	17T	3 層	磨石（打製石斧）	105	73	34		花崗岩	転用。
43	11	17T	9 層	磨石・敲石	104	67	26		花崗岩	
43	12	17T	一括	磨石（石庖丁）	44	42	7		粘板岩	穿孔あり。転用。

第 13 項　長野南原遺跡（５次調査）

1．調査原因：特別養護老人ホーム増床
2．所 在 地：南相馬市原町区長野字南原
3．調査期間：令和３年 12 月 15 日～ 12 月 24 日
4．対象面積：3,905 ㎡
5．調査面積：　320 ㎡
6．調査担当：埋蔵文化財調査員　濱須 脩
7．調査成果：調査対象範囲内に、長さ 10 ｍ×幅２ｍの調査区を 16 箇所に配置して、埋蔵文化財の確認を行った。調査区の基本土層は、ＬⅠは畑地耕作土による表土で、ＬⅡ・Ⅲは黒褐色の堆積土である。基盤層はＬⅢ下層にある黄色ソフトローム（ＬⅣ）もしくは段丘堆積による砂礫層（ＬＶ）である。部分的にＬⅣが失われＬＶが見られることから、後世に削平を受けている可能性が高い。

　試掘調査では１・１２Ｔで竪穴住居跡を確認した。また１・10・11・14 Ｔではピットを確認している。基盤層を確認する過程では遺物は出土しなかった。

8．調査所見：今回の試掘調査では、竪穴住居跡２軒・ピット 17 基を確認したことから、工事施工が基盤層に達する計画の場合には、保存協議を要する。

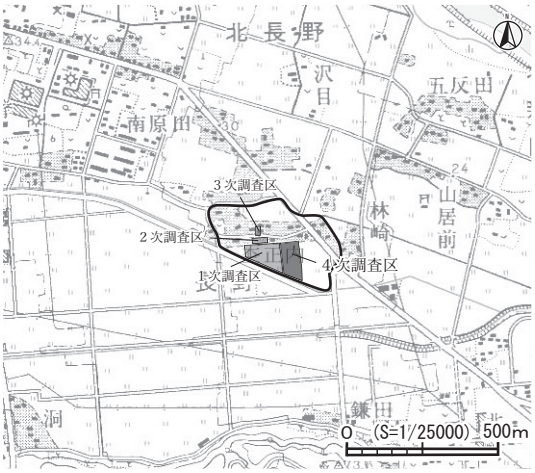


図 44　長野南原遺跡位置図

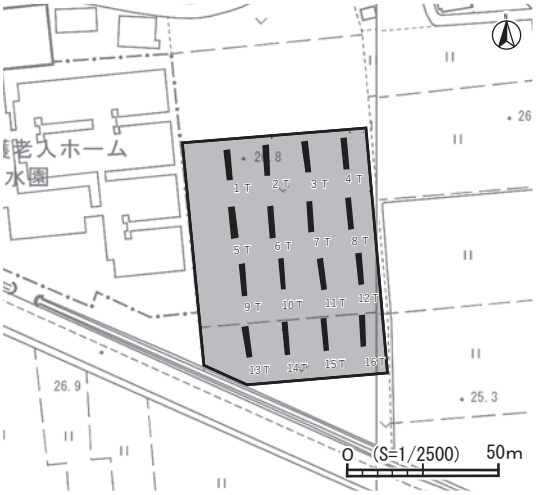


図 45　調査区位置図

写真 73　調査区遠景

写真 74　重機掘削状況

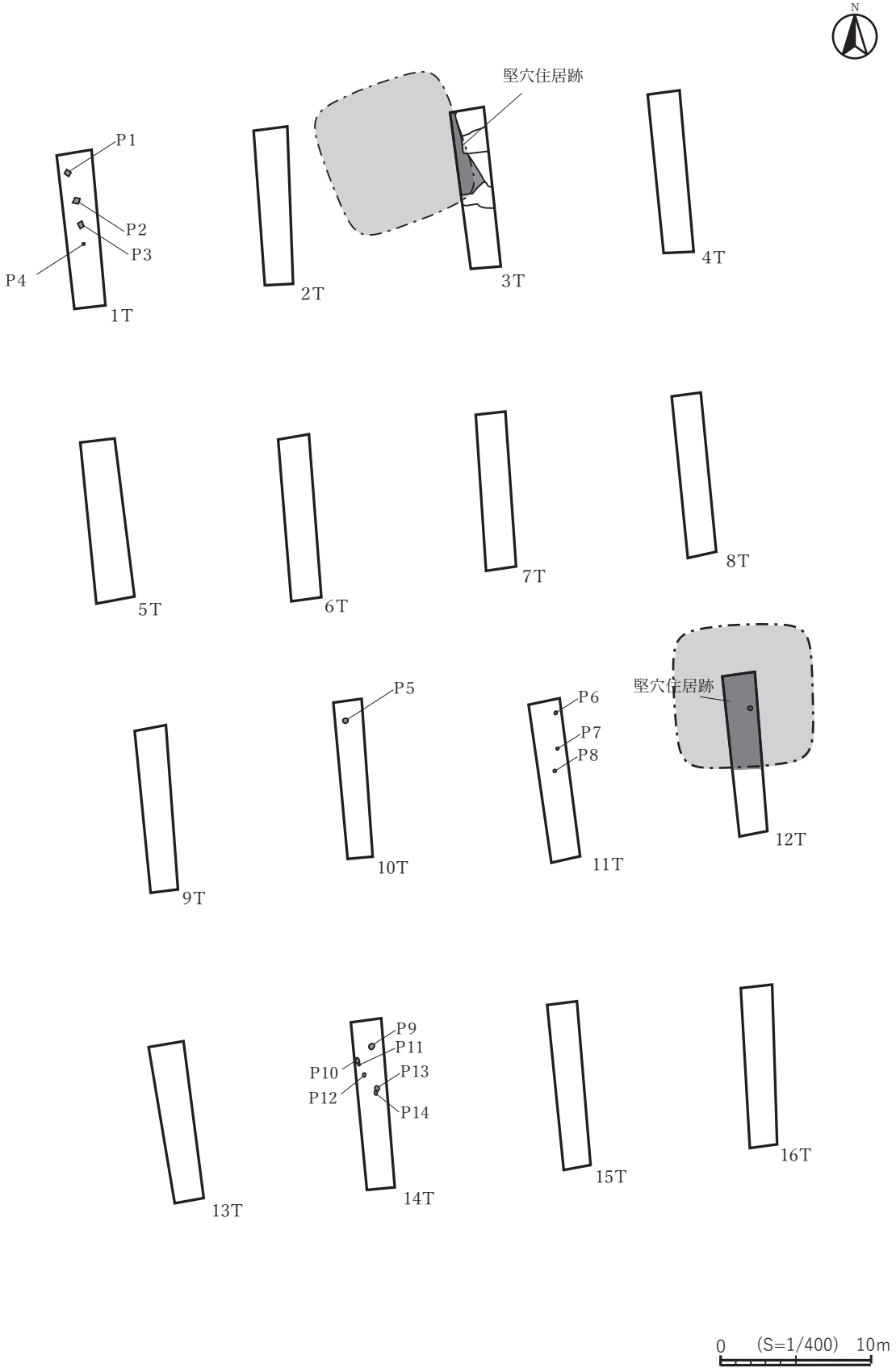

N
竪穴住居跡
P1
P2
P3
P4
1T
2T
3T
4T
5T
6T
7T
8T
P5
9T
10T
P6
P7
P8
11T
竪穴住居跡
12T
P9
P11
P10
P13
P12
P14
13T
14T
15T
16T
0　(S=1/400)　10m

図 46　遺構配置図

写真 75　3 T 調査状況

写真 76　12T 調査状況

写真 77　3 T 土層断面

写真 78　12T 土層断面

写真 79　1 T 調査状況

写真 80　14T 調査状況

第 14 項　北原田Ｂ遺跡

1．調査原因：個人住宅建築
2．所 在 地：南相馬市原町区北長野字北原田
3．調査期間：令和 3 年 12 月 13 日
4．対象面積：1,352 ㎡
5．調査面積：　40 ㎡
6．調査担当：埋蔵文化財調査員　濱須 脩
7．調査成果：調査対象範囲内に、長さ 10 m×幅 2 mの調査区を 2 箇所に配置して、埋蔵文化財の確認を行った。調査区の基本土層は、ＬⅠは黒褐色土の表土で、ＬⅡは黄褐色ロームブロックを含む盛土、ＬⅢは基盤層となる砂礫層である。基盤層は表土面から約 60cm の深さで確認した。試掘調査対象範囲では、基盤層の黄褐色ソフトロームが欠層し、段丘堆積による砂礫層が基盤層となっていることから、後世に大規模な造成が行われた可能性が高い。

　基盤層を確認する過程のなかで、遺構・遺物等の埋蔵文化財は確認できなかった。

8．調査所見：今回の試掘調査では、保存協議を要する埋蔵文化財は確認されなかったことから、改めた保存協議の必要はないが、工事施工にあたっては慎重工事により対応することが望ましい。

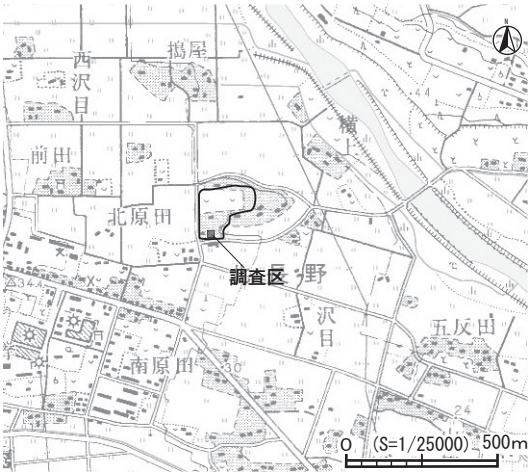


図 47　北原田Ｂ遺跡位置図

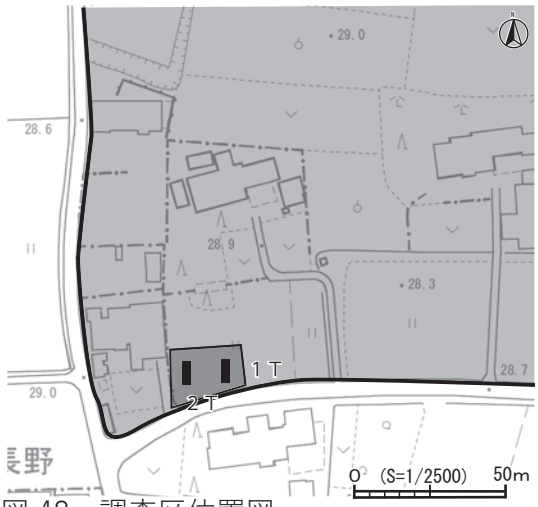


図 48　調査区位置図

写真 81　1Ｔ調査状況

写真 82　2Ｔ調査状況

第 15 項　西廻東廻横穴墓群

1．調査原因：道路敷設
2．所 在 地：南相馬市原町区雫字東廻
3．調査期間：令和 4 年 1 月 12 日～ 2 月 10 日
4．対象面積：12,000 ㎡
5．調査面積：　68.5 ㎡
6．調査担当：主任学芸員　荒 淑人
7．調査成果：調査対象範囲内に、任意の規模の調査区を 15 箇所に配置して、埋蔵文化財の確認を行った。調査区の基本土層は、ＬＩは腐葉土の表土で、ＬⅡは堆積土・ＬⅢは地山ブロックを含む崩落土、ＬⅥが基盤層となる黄褐色泥岩の岩盤である。基盤層はＬⅢ下層にある黄色ソフトローム（ＬⅣ）もしくは段丘堆積による砂礫層（ＬＶ）である。

　調査区は、微地形の観察で窪地となっている部分に、等高線に平行となるように設定し、最終的には目視できるものを含めて 13 基の横穴墓を確認した。

　確認された横穴墓は、南東方向に開析した小支谷を 1 つの単位として、3 グループで構成されていることが判明した。

　最も南端にある谷では、1 号墓、中央の谷では 2 ～ 6 号墓、北側の谷では 7 ～ 13 号墓が分布している。

8．調査所見：今回の試掘調査では、道路建設範囲において 13 基の横穴墓が分布していることが確認されたことから、工事施工においては道路法線の変更等により横穴墓を保存することが望ましいが、計画変更が困難な場合には、記録保存のための発掘調査を要する。

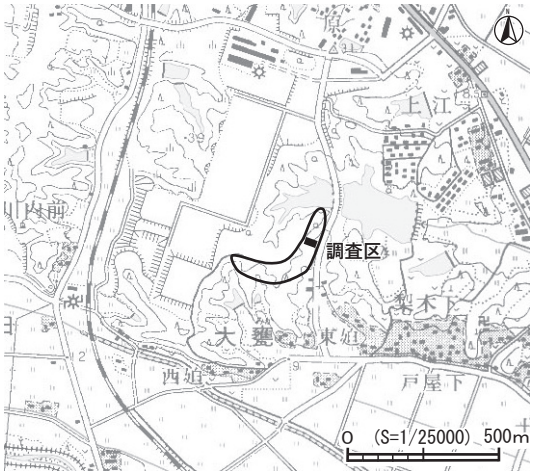


図 49　西廻東廻横穴墓群位置図

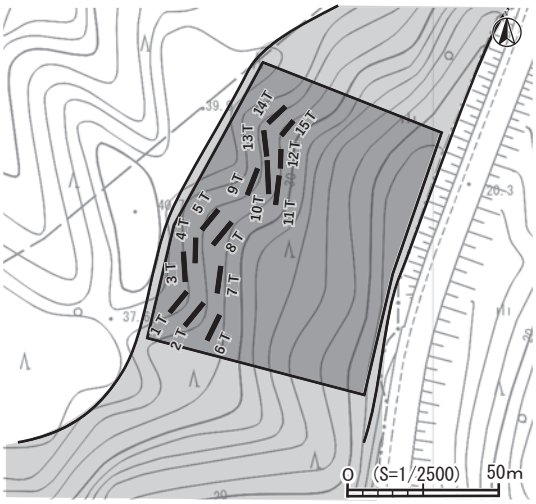


図 50　調査区位置図

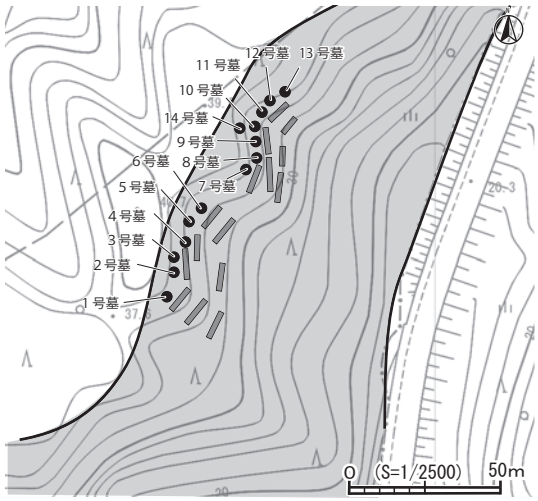


図 51　横穴墓分布図

写真 83　１Ｔ調査状況

写真 84　１号墓検出状況

写真 85　３Ｔ調査状況

写真 86　３号墓検出状況

写真 87　５号墓前庭部検出状況

写真 88　10 号墓開口状況

写真 89　10 号墓前庭部

写真 90　12T 調査状況

写真 91　10T 基本土層

写真 92　作業風景

写真 93　作業風景

第 16 項　反町遺跡

1．調査原因：防火貯水槽設置
2．所 在 地：南相馬市鹿島区南屋形字反町
3．調査期間：令和４年３月９日
4．対象面積：30㎡
5．調査面積：　６㎡
6．調査担当：埋蔵文化財調査員　濱須 脩
7．調査成果：調査対象範囲内に、長さ３ｍ×幅１ｍの調査区を２箇所に配置して、埋蔵文化財の確認を行った。調査区の基本土層は、ＬⅠ～Ⅲは黒褐色土の耕作土（表土）で、ＬⅣは暗褐色の堆積土、ＬⅤは基盤層となる黄褐色粘土層である。基盤層は表土面から約 25cm の深さで確認した。試掘調査では、ＬⅠ～Ⅲから少量の土師器・須恵器が出土したが、保存協議を要する埋蔵文化財は確認できなかった。
8．調査所見：今回の試掘調査では、保存協議を要する埋蔵文化財は確認されなかったことから、改めた保存協議の必要はないが、工事施工にあたっては工事立会により対応することが望ましい。

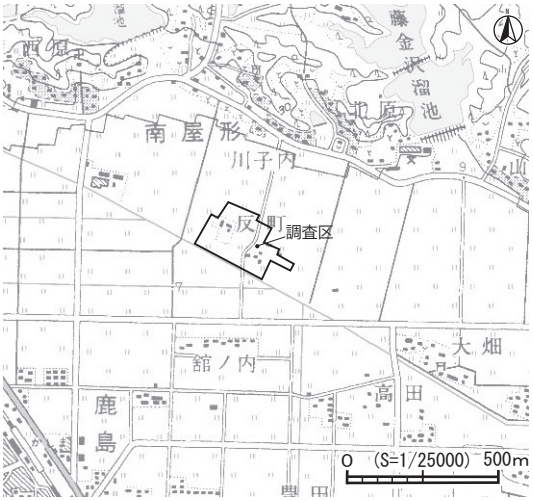


図 52　反町遺跡位置図

図 53　調査区位置図

写真 94　１Ｔ調査状況

写真 95　２Ｔ調査状況

報　告　書　抄　録

ふりがな	みなみそうましないいせきはっくつちょうさほうこくしょ１６
書名	南相馬市内遺跡発掘調査報告書１６
副書名	令和３年度試掘調査報告
シリーズ名	南相馬市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番名	第４０集
編著者名	川田強・荒淑人
編集機関	福島県南相馬市教育委員会
所在地	〒９７５－００６２　福島県南相馬市原町区本陣前一丁目７０番地　ＴＥＬ０２４４－２４－５２８４
発行年月日	西暦２０２３（令和５年）３月３１日

所収遺跡	所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯 / 東経	調査期間 上段：着 下段：完	面積（㎡）	調査原因
羽山岳の木戸跡	南相馬市原町区上太田字新橋	２１２５ ００１６１	37° 36′ 53″ / 140° 57′ 21″	２１０５１７ / ２１０５３１	12	災害復旧
萱浜原畑遺跡	南相馬市原町区萱浜字原ノ山	２１２５ ００３５３	37° 37′ 46″ / 141° 00′ 12″	２１０６０９ / ２１０６０９	18	個人住宅
片草南原遺跡	南相馬市小高区片草字南原	２１２５ ００４５４	37° 34′ 32″ / 140° 58′ 17″	２１０６１０ / ２１０６１０	14	変電施設
羽山Ｂ遺跡	南相馬市原町区片倉字羽山	２１２５ ００３２９	37° 35′ 40″ / 140° 54′ 27″	２１０６１０ / ２１０６１０	2	太陽光発電
松ヶ沢Ａ遺跡	南相馬市原町区小木迫字松ヶ沢	２１２５ ００６９４	37° 34′ 41″ / 140° 59′ 30″	２１０６１５ / ２１０７１５	132.4	太陽光発電
白幡前遺跡	南相馬市小高区大井字上山畑	２１２５ ００６３３	37° 34′ 20″ / 141° 00′ 28″	２１０７２０ / ２１０７２１	30	太陽光発電
真野古墳群Ｂ地区	南相馬市鹿島区小池字長沼	２１２５ ０００３９	37° 41′ 47″ / 140° 56′ 38″	２１０７２８ / ２１０７２９	40	個人住宅
高見町Ｂ遺跡	南相馬市原町区高見町一丁目	２１２５ ００３４６	37° 38′ 22″ / 140° 59′ 22″	２１０８２４ / ２１０８２４	26	建売分譲
東町遺跡	南相馬市原町区東町一丁目	２１２５ ００１７０	37° 38′ 35″ / 140° 57′ 50″	２１０８２６ / ２１０８２６	12	個人住宅
八幡林遺跡	南相馬市鹿島区寺内字八幡林	２１２５ ０００４１	37° 41′ 48″ / 140° 57′ 17″	２１０９２７ / ２１１１１２	262	集合住宅
荒神前遺跡	南相馬市小高区片草字一里段	２１２５ ００５１２	37° 34′ 23″ / 140° 58′ 21″	２１１１１５ / ２１１１１５	27	個人住宅
北原貝塚	南相馬市小高区浦尻字滝ヶ迫	２１２５ ００５０３	37° 31′ 06″ / 141° 01′ 46″	２１１１１５ / ２２０１１４	36.7	道路建設
北原田Ｂ遺跡	南相馬市原町区北長野字北原田	２１２５ ００２８３	37° 39′ 33″ / 140° 56′ 25″	２１１２１３ / ２１１２１３	40	個人住宅
長野南原遺跡	南相馬市原町区長野字南原	２１２５ ００４４６	37° 39′ 04″ / 140° 56′ 39″	２１１２１５ / ２１１２２４	320	特別養護老人ホーム増床
西迫東迫横穴墓群	南相馬市原町区雫字蛭沢	２１２５ ００２０１	37° 36′ 51″ / 140° 59′ 37″	２２０１１２ / ２２０２１０	68.5	道路建設
反町遺跡	南相馬市鹿島区南屋形字反町	２１２５ ００６８６	37° 42′ 31″ / 140° 58′ 43″	２２０３０９ / ２２０３０９	6	防火貯水槽

所 収 遺 跡	種 別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
羽山岳の木戸跡	その他	近世	石垣		
萱浜原畑遺跡	散布地	弥生・古墳・奈良・平安			
片草南原遺跡	散布地	縄文・弥生・古墳・奈良・平安			
羽山Ｂ遺跡	集落	縄文			
松ヶ沢Ａ遺跡	製鉄	平安	廃滓場・木炭焼成土坑		
白幡前遺跡	散布地	縄文・古墳			
真野古墳群Ｂ地区	古墳	古墳			
高見町Ｂ遺跡	散布地	縄文・弥生・古墳・奈良・平安			
東町遺跡	集落	縄文・平安			
八幡林遺跡	古墳・集落	縄文・弥生・古墳・平安	円墳５基	土師器・須恵器	
荒神前遺跡	集落	縄文・弥生・古墳・奈良・平安			
北原貝塚	集落・貝塚	縄文	貝層	縄文土器	
北原田Ｂ遺跡	散布地	奈良・平安			
長野南原遺跡	集落	平安	竪穴住居跡		
西廻東迫横穴墓群	古墳	古墳	横穴墓１４基	須恵器	
反町遺跡	集落	弥生・古墳・平安			

印　刷　2023 年 3 月 31 日
発　行　2023 年 3 月 31 日
南相馬市埋蔵文化財調査報告書第 40 集
南相馬市内遺跡発掘調査報告書 16
－令和 3 年度試掘調査報告－
編　集　南相馬市教育委員会 文化財課
発　行　南相馬市教育委員会
〒 975 - 0062　福島県南相馬市原町区本陣前一丁目 70 番地
印　刷　有限会社　愛原印刷所
〒 975 - 0003　福島県南相馬市原町区栄町 1 － 8